永遠の真理

ETERNAL TRUTH

2015年 12月

「洗足聖餐式」「最終的な裁きと新地」「準備はできているか」

永遠の真理

いま永遠の真理の土台の上に堅く立ちなさい。(3T p.45)

目次

今月の聖書勉強
「洗足聖餐式」 4
聖書の教え

朝のマナ
「最終的な裁きと新地」 8
われらの主よ、きたりませ

現代の真理
「準備はできているか」 40
三重のメッセージ - もう一人の御使のメッセージ

力を得るための食事
「かぼちゃのカレーコロッケ」 50

お話コーナー
「神さまの食事を選んだダニエル」 52

教会

【正丸教会】

〒368-0071　埼玉県秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1
電話：0494-22-0465
FAX：0494-40-1045

【高知集会所】

〒780-8015　高知県高知市百石町 1-17-2
電話：088-831-9535

【沖縄集会所】

〒905-2261　沖縄県名護市天仁屋 600-21
電話：0980-55-8136

アクセス

ホームページ：http://www.4angels.jp
メール：support@4angels.jp

発行日　2015 年 11 月 30 日
編集＆発行　SDA 改革運動日本ミッション
〒368-0071 秩父郡横瀬町芦ヶ久保 1607-1

Illustrations: Dreamtimes on front cover;
HighRes on pages 8, 52

Printed in Japan

信仰によって

ヨハネは、従順によって救いを得るべきだと教えているのではなく、従順が信仰と愛の実であると教えた。「あなたがたが知っているとおり、彼は罪をとり除くために現れたのであって、彼にはなんらの罪がない。すべて彼におる者は、罪を犯さない。すべて罪を犯す者は彼を見たこともなく、知ったこともない者である」と、彼は言った（ヨハネ第一 3:5, 6）。もしわれわれがキリストにおり、神の愛が心に宿っているならば、われわれの感情、思想、行動は神のみこころに一致し、きよめられた心は、神の律法の教えに調和する。

神の戒めに従おうと努めながら、喜びや平安のない人が多い。彼らの経験に喜びや平安が欠けているのは、信仰を働かさないからである。彼らはあたかも、塩の土地や焼けつく荒野を歩いているかのようである。彼らは多くのことを求めることができるのに、ほとんど求めない。神の約束には制限がないのである。このような人たちは、真理に従うことによって与えられるきよめを正しく示していない。主はご自分のむすこ、娘たちのすべてを幸福で、平和にみち、従順なものにさせて下さる。信者は信仰を働かせることによって、これらの祝福を受けるようになる。信仰によって、品性の欠陥がすべて補われるのであり、すべての不潔なものがきよめられ、欠点がなおされ、長所がのばされるのである。

祈りは、罪との戦いとクリスチャン品性の発達における成功の手段として、天が定めたものである。信仰の祈りにこたえて与えられる神の力は、願い求めるすべてのことを嘆願者の心の中に成就する。われわれは、罪のゆるしを、聖霊を、キリストのような性質を、主の働きをなすための知恵と力を、また主が約束された賜物を、求めることができる。そして、それらは「与えられる」と約束されているのである。（患難から栄光へ下巻 266, 267）

聖書の教えXII

9章　洗足聖餐式

A. 洗足式

キリストがご自分の苦難の前に二階の広間で最後にご自分の弟子たちと集会をもたれたとき、このお方には彼らに告げるべきことがたくさんありました。それがヨハネ13章～16章に記録されています。世の罪のためのこのお方の死を象徴していた最後の過越節という厳粛な機会でした。

キリストの体と血の象徴が弟子たちの間に配られる前に、キリストは彼らの足を洗われました。「主の行為によって、この謙遜式は、聖別された儀式となった」(各時代の希望下巻126) この儀式の目的は、すべてのクリスチャンに課されたもので、参加する者が自分たちの心を探り、自分自身の苦い根やその他の品性の欠点を認め、兄弟姉妹間の誤解を一掃するように導くことです (ヨハネ13:1–17)。

「この儀式は、聖さん式のためにキリストがお定めになった準備である。高慢、不和、権力争いが宿っているあいだは、心はキリストとのまじわりにはいることができない。われわれは、キリストのからだと血との聖さんを受け る用意ができていない。そこでイエスは、ご自分の謙遜を記念するものを最初に守るようにお定めになったのである」(各時代の希望下巻127)

「この奉仕の目的は、わたしたちの主のへりくだりと、このお方がご自分の弟子たちの足を洗われたときに与えてくださった教訓を思い起こさせることである。人のうちには自分をほかの兄弟よりも高く評価し、自分自身のために働き、自分自身に仕え、最高位を求める傾向がある。そしてこのことから、しばしば悪い憶測と冷酷な精神が生じる。聖さん式に先立つ洗足式は、こうした誤解を一掃し、人を利己心から引き離し、高慢というたけうまから精神のへりくだりへとおろして、兄弟の足を洗うよう導くのである。……

洗足式はキリストによって特別に命じられた儀式であり、この機会に聖霊がご臨在なさり、キリストの儀式の証人となり、印を押される。このお方は罪を自覚させ、心を和らげられる。信徒たちを互いに引き寄せ、心において一つにしてくだ

さる。彼らは、神の子らの心を神から引き離すために積み上げられてきたごみを取り除くためにキリストが実際にご臨在くださっていることを感じるようになる(レビュー・アンド・ヘラルド 1897 年 6 月 22 日)

「キリストはペテロに向かっておごそかに言われた『もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしとなん の係わりもなくなる』(ヨハネ 13:8)。ペテロがこばんだ奉仕は、もっと高いきよめの型であった。キリストは心 から罪のけがれを洗い落とすためにこられたのであった。キリストに足を洗ってもらうのをこばむことによって、ペテロは低いきよめの中に含まれている高いきよめをこばんでいるのであった。彼は事実上主をこばんでいるのであった」(各時代の希望下巻 121)

「ご自分の弟子たちの足を洗われた模範は、ご自分を信じるすべての人の益のために与えられたのであった。このお方は彼らにご自分の模範に従うようにと要求された。このへりくだりの儀式は、彼らの謙遜と忠実を試すことを意図しただけではなく、神の民の贖いが、彼らの側の謙遜と継続的な従順という条件に基づいて買われたものであるということをいつも生き生きと思い起こさせるためであった」(預言の霊 1 巻 202)

「144,000 の人々は、みな印せられ、完全に一致していた。彼らの顔には、神、新エルサレムと書かれ、そして、イエスの新しい名がついた輝く星が書かれていた。悪人たちはわれわれの幸福な聖い状態を見て激怒し、荒々しく襲いかかってわれわれを捕え、投獄しようとしたが、われわれが主の名によって手を伸ばすと、彼らはどうすることもできずに倒れてしまった。そのとき、サタンに属する人々は、互いの足を洗いきよい接吻をもって兄弟たちとあいさつをかわすことができるわれわれを神が愛しておられたことを知って、われわれの足もとに伏して礼拝した」(初代文集 64)

使徒パウロが、イエス・キリストの福音のなかで述べているきよいあいさつは、いつも、その真の性質を考えなければならない。それは、きよい接吻である。それは、クリスチャンの友人たちが別れる時や、数週間または数か月後に再会するときの、交わりのしるしであるとみなさるべきである。テサロニケ第一 5:26 において、パウロは、「すべての兄弟たちに、きよい接吻 (せっぷん) をもって、よろしく伝えてほしい」と言っている。パウロは、同じ章のなかで、「あらゆる種類の悪から遠ざかりなさい」と言っている。きよい接吻が適当な時と場所で行われ

るならば、悪く思われることはないのである（同上 220）

B. 主の晩餐

主の晩餐、すなわち聖餐式として知られている儀式は、キリストの犠牲を記念したものです。それはまたこのお方の再臨を指し示しています。この儀式は旧約時代の年ごとの過越の祭りに代るものですが（マタイ 26:28, 29）、使徒パウロを通して与えられた主の指示と調和し、もっと頻繁に行われるべきものです（コリント第一 11:26）。

主の晩餐を通して、わたしたちはわたしたちの主イエスの体と血の象徴にあずかり、それを信じる自分たちの信仰と、十字架上のこのお方の死をわたしたちの救いのための唯一の備えとして受け入れることを表明するのです（ヨハネ 6:53–56, 63; ローマ 5:10）。

パン種と発酵はしばしば罪の象徴として言及され（コリント第一 5:7, 8）、過越のパンはパン種のないもの、過越のぶどう汁は発酵していないものでなければなりませんでした（イザヤ 65:8）。キリストのその同じパンとぶどう汁をもって、聖餐式を制定されました。

主の晩餐は、わたしたちがキリストと、また互い（「キリストの体の交わり」）に持つ交わりの象徴であり、この目に見える体、すなわち地上で組織されたこのお方の教会のメンバーだけがこの儀式に参加します（出エジプト記 12:48; コリント第一 10:16, 17; 12:12, 18, 20, 22）。

霊的な準備―そこには心の吟味、悔い改め、告白、和解、また信仰の一致（エペソ 4:3, 4）が含まれています―が、主の晩餐の儀式に参加することができる前に要求されています（コリント第一 11:18–20, 27–29）。

パンとぶどう汁にあずかることによって、わたしたちは罪の悔い改めとキリストを自分の個人的な救い主として受け入れることを示します。この聖餐式はイエスの苦難と死を記念し、体としての教会を強め、柔和と愛と一致のうちに守ります。

「弟子たちといっしょにパンとぶどう酒にあずかることによって、キリストは、ご自分が彼らのあがない主となられることを彼らに契約された。主は彼らと新しい契約をされたが、その契約によって主を受け入れる者はみな神の子となり、キリストと共同の相続人となるのである。この契約によって、天がこの世と来世でお与えになることのできるあらゆる祝福が彼らのものであった。この契約書はキリ

ストの血によって批准されるのであった。そしてこの聖さん式をとり行なうことは、堕落した人類という大きな全体の一部分として弟子たちひとりびとりのために個人的に払われた無限の犠牲をたえず彼らの目の前に示すことになった」（各時代の希望下巻 138）

「われわれが聖潔な生活を送ることができるのは、カルバリーの十字架上でそそぎ出された生命を自分のために受けることによってである。そしてこの生命は、キリストのみことばを信受し、キリストが命じられたことをなすことによって、受けられるのである。こうしてわれわれは、キリストと一つになる。『わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにおり、わたしもまたその人におる。生ける父がわたしをつかわされ、また、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者もわたしによって生きるであろう』（ヨハネ 6:56,57）。この聖句は、特別な意味において、聖さん式にあてはまる。信仰によって主の大いなる犠牲を瞑想するとき、魂はキリストの霊的生命に同化する」（各時代の希望下巻 141,142）

「人の救いは自分の心に絶えず、キリストの清めの血を受けることにかかっている。そこで、主の晩餐はときたま、あるいは年ごとに守るのではなく、年ごとの過越節より頻繁に行われなければならない」（預言の霊 1 巻 203）

「『人の子の肉を食べず、また、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない。……わたしの肉はまことの食物、わたしの血はまことの飲み物である』と主は言われた（ヨハネ 6:53-55）。このことは肉体的な面において事実である。この世の生命さえキリストの死のおかげである。われわれの食べるパンは、キリストの裂かれたからだをもって買われたものである。われわれの飲む水は、キリストの流された血によって買われたのである。聖徒であろうと罪人であろうと、日ごとの食物を食べる者はだれでも、キリストのからだと血によって養われているのである。どのパンにもカルバリーの十字架の印がおされている。どの泉にもカルバリーの十字架が反映している。キリストはご自分の大いなる犠牲をさし示して、こうしたすべてのことをお教えになった。あの二階座敷の聖さん式から輝き出ている光は、われわれの日常生活の飲食物を神聖なものとしている。家族の食卓は、主の食卓となり、毎度の食事は聖さんとなる」（各時代の希望下巻 141）

われらの主よ、きたりませ

Maranatha

12 月「最終的な裁きと新地」

聖なる都の上にかかるパノラマの光景

「なぜなら、わたしたちは皆、キリストのさばきの座の前にあらわれ、善であれ悪であれ、自分の行ったことに応じて、それぞれ報いを受けねばならないからである。」(コリント第二 5:10)

み座の上に十字架が現わされる。そしてちょうどパノラマの光景のように、アダムの誘惑と堕落の場面、救いの大いなる計画における一歩一歩が、次々に示される。救い主がいやしい身分に生まれられたこと、質素で従順なその幼年時代、ヨルダン川でのバプテスマ、断食と荒野の試み、天の最も尊い祝福を人々に示されたその公生涯、愛と恵みの行為に満ちた日々、寂しい山の中での夜通しの祈り、恵みの行為に対してしっとと憎悪と悪意とによる陰謀をもって報いられたこと、全世界の罪の重荷におしつぶされそうなゲッセマネにおける恐るべき神秘的な苦悩、残忍な暴徒の手に売り渡されたこと、あの恐怖の夜の恐ろしい諸事件、すなわちいちばん愛された弟子たちにも捨てられ、無抵抗の囚人として、荒々しくエルサレムの通りを引き立てられて行ったこと、神のみ子がアンナスの前で手柄顔に見せ物にされ、大祭司の邸宅とピラトの法廷で審問を受け、卑怯で残酷なヘロデの前で嘲笑され、侮辱され、拷問を受け、ついには死罪の宣告を受けられたこと、—こうしたすべてのことが、ありありと描き出される。

そして今、動揺する群衆の前に、最後の光景が現わされる。すなわち、苦難を耐え忍ばれる主が、カルバリーへの道をたどって行かれる姿、天の大君が十字架につけられ、高慢な祭司たちや嘲笑している暴徒たちが、息もたえだえの神のみ子の苦悩をあざけっている光景、超自然的な暗黒、世の救い主が息を引き取られた瞬間に、地が揺れ動き、岩が裂け、墓が開いたことなど、そうした最後の光景が示されるのである。

恐るべき光景が、起こったとおりにそのまま示される。サタンとその悪天使及びその民たちは、自分たちのしわざであるその光景から顔をそむける力はない。一人一人が、自分の演じた役割を思い出す。……人々はみな、自分たちの罪がどんなに凶悪なものであったかを見る。彼らは、太陽よりも強い光を放つ主のみ顔の威光からかくれようとするがむだである。一方贖われた者たちは、その冠を救い主の足もとに投げ、「主はわれらのために死なれた」と叫ぶ。(各時代の大争闘 下巻 451-453)

歴史上の人物も審判に出席

「わたしは自分をさして誓った、……『すべてのひざはわが前にかがみ、すべての舌は誓いをたてる』。 人はわたしについて言う、『正義と力とは主にのみある』と。人々は主にきたり、主にむかって怒る者は皆恥を受ける。」(イザヤ 45:23,24)

贖われた群衆の中には、雄々しいパウロや熱心なペテロ、愛し愛されたヨハネなどキリストの使徒たちや、真実な心の持ち主であったその兄弟たちがおり、彼らとともに大ぜいの殉教者たちがいる。一方城壁の外には、あらゆる恥ずべきもの忌むべきものとともに、かつて彼らを迫害し、投獄し、殺した者たちがいる。かつて聖徒たちを責めさいなみ、彼らの極度の苦悶を見て悪魔のような喜びを味わった残忍非道なネロもいて、自分がかつて迫害した人々が高められ、歓喜するありさまを見る。またネロの母もそこにいて、自分自身の行為の結果を見、自分の悪い品性がそのまま息子に遺伝したこと、また自分の感化と手本とによって激情がますますひどくなり、世を戦慄させるような犯罪の実を結んだことを知る。(各時代の大争闘下巻 453)

そこには、接近しただけで諸国をふるえあがらせた高慢で野望に満ちたナポレオンもいる。(初代文集 471)

そこにはまた、キリストの大使であると公言しながら、神の民の良心を支配しようとして、拷問台や土牢や火刑柱を使用した法王教の司祭や高僧たちがいる。神よりも自分を高くし、僭越にもいと高きおかたの律法を変更しようとした、高慢な法王たちもいる。こうした偽りの教会指導者たちは、神に対して申し開きをしなければならないが、できることならそれを免れたいと願う。彼らは全知全能の神が、ご自分の律法を非常に大事になさるおかたであり、また罰すべき者を決しておゆるしにならないかたであることを悟るが、もう手遅れである。今彼らは、キリストが苦難のうちにあるご自分の民と利害を一つになさったことを知り、また、「わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」との主ご自身のみ言葉の力を身に感じるのである (マタイ 25:40)。

全世界の悪人たちは、天の政府に対する大反逆という罪名のもとに神の法廷に告訴される。彼らを弁護する者もなければ、言いわけの余地もない。こうして永遠の死の宣告が彼らに下される。(各時代の大争闘下巻 453, 454)

神の正義を認める悪人

「それだのに、あなたは、なぜ兄弟をさばくのか。あなたは、なぜ兄弟を軽んじるのか。わたしたちはみな、神のさばきの座の前に立つのである。 すなわち、『主が言われる。わたしは生きている。すべてのひざは、わたしに対してかがみ、すべての舌は、神にさんびをささげる（神を告白する）であろう』と書いてある。」(ローマ 14:10, 11)

魅せられたかのように、悪人たちは神のみ子の戴冠式をながめた。彼らは、神のみ子がそのみ手に、自分たちが今まで軽べつし違反してきた神の律法の板を持っておられるのを見る。また、救われた者たちがいっせいに驚嘆と喜びと賛美の声をあげるのを見る。そしてその歌声の波が城外の群衆にまで押し寄せると、全部の者が異口同音に「全能者にして主なる神よ。あなたのみわざは、大いなる、また驚くべきものであります。万民の王よ、あなたの道は正しく、かつ真実であります」と絶叫し、ひれ伏していのちの君を拝するのである (黙示録 15:3)。

サタンはキリストの栄光と威厳とを見てまひしたようになる。かつては守護のケルブであった彼は、自分がどこから落ちたかを思い出す。光り輝くセラフ、「黎明の子、明けの明星」が、なんと変わり、なんと堕落したことであろう。かつては尊敬されていた会議から、彼は永遠に除外されてしまったのである。彼は、今は別の天使が神の栄光をおおって天父のそばに立っているのを見る。彼は、背が高く威厳に満ちた容姿の一人の天使がキリストの頭に冠をのせるのを見、この天使の高い地位に自分が立つはずであったことを知る。

サタンが罪を抱かず純潔であったときのふるさと、……サタンの記憶によみがえる。……サタンは、その労苦の実である自分の王国を見るとき、ただ失敗と破滅だけを見る。

反逆がついに打ち破られ、サタンの経歴と品性が明るみに出される時が、今きた。大欺瞞者サタンが、キリストを王位から退け、神の民を滅ぼし、神の都を占領しようと、最後の努力をすることにおいて、彼の正体が完全に暴露された。サタンと協力してきた者たちも、彼の働きが全く失敗したことを知る。……サタンは全宇宙の憎悪の的となる。

サタンは、自分から進んで反逆したことによって、自分が天に適しない者になったことを知る。彼は神と戦うために自分の能力を訓練してきた。彼にとっては、天の純潔と平和と調和とはこの上ない苦痛となるであろう。神のあわれみと正義に対するサタンの非難は、今こそ沈黙させられた。彼が主に浴びせようと努めてきた非難は、全部彼自身に向けられる。そして今、サタンはひれふして、自分の上にくだった判決が正しいことを認める。(各時代の大争闘下巻 454-456)

擁護された神のご品性

「全能者にして主なる神よ。あなたのみわざは、大いなる、また驚くべきものであります。万民の王よ、あなたの道は正しく、かつ真実であります。」(黙示録 15:3)

長年にわたって争われてきた真理と誤謬のすべての問題が、今明らかにされた。反逆の結果、すなわち神の律法を廃することの結果が、すべての知的被造物の目の前で明らかになった。神の統治と対照的なサタンの支配が行なわれた結果が、全宇宙の前に公開された。サタン自身の行為が、彼を罪に定めたのである。神の知恵と正義といつくしみとが、完全に擁護される。大争闘における神のすべての処置は、ご自分の民の永遠の幸福のために、そして神の創造されたすべての世界の幸福のために行なわれたものであることが明らかになる。……罪の歴史は、神が創造されたすべての者の幸福が神の律法の存在と結びついていることを、永遠にわたってあかしする。大争闘のいっさいの事実が明らかになると、全宇宙は、忠誠な者も反逆者も、異口同音に、「万民の王よ、あなたの道は正しく、かつ真実であります」と言明する。

人類のために天父とみ子によって払われた大犠牲が、全宇宙の前に明らかにされた。今こそキリストがご自分の正当な地位を占め、すべての支配、権威、また唱えられるあらゆる名にまさってあがめられる時が来た。キリストが恥をもいとわないで十字架に耐えられたのは、ご自分の前に置かれた喜びのため、すなわち、多くの子ら

を栄えに入らせるためであった。その悲しみと恥は想像できないほど大きかったが、しかし喜びと栄光はそれよりも大きいのである。キリストは、贖われた者たちがご自分のみかたちに回復され、そのおのおのの心に神の完全なお姿を宿し、その顔に王なる神のみかたちを反映するのを見られる。主は、ご自分の魂の苦しみの結果が、彼らの上に現われているのをごらんになって満足される。そして主は、義人の群れにも悪人の群れにも聞こえる声で、「見よ、わたしの血をもって贖ったものを。わたしが彼らのために苦難を受け、彼らのために死んだのは、永遠に彼らをわたしの前におらせるためである」と主は宣言される。そして、み座の周囲の白い衣をまとった者たちが「ほふられた小羊こそは、力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、さんびとを受けるにふさわしい」と賛美する歌声があがる (黙示録 51:2)。(各時代の大争闘下巻 457, 458)

滅ぼされた罪と罪人

「万軍の主は言われる、見よ、炉のように燃える日が来る。その時すべて高ぶる者と、悪を行う者とは、わらのようになる。その来る日は、彼らを焼き尽して、根も枝も残さない。」(マラキ 4:1)

サタンは、神の正義を認めて、キリストの主権の前にひれふさずにはいられなかったにもかかわらず、彼の品性はもとのままである。反逆の精神は、奔流のように、再び爆発する。狂気の思いに満たされて、彼は大争闘に負けまいと決心する。天の王に対して最後の必死の戦いをする時が来た。彼は部下たちの真ん中にとび込んで行って、自分自身の怒りを彼らに吹き込み、直ちに戦いに奮起させようとする。しかし、サタンが反逆におびき入れた無数の群衆の中で、サタンの主権を承認する者はひとりもいない。サタンの権力は終わりを告げたのである。悪人たちは、サタンを奮起させたのと同じ神に対する憎悪の念に燃えているが、しかし自分たちの立場が絶望的であることと、主に勝つことができないこととを知っている。彼らの怒りはサタンと、サタンの欺瞞の手先であった者たちとに向けられる。彼らは悪鬼のような怒りに満たされて、彼らにとびかかる。

主はこう言われる、「あなたは自分を神のように賢いと思っているゆえ、見よ、わたしは、もろもろの国民の最も恐れている異邦人をあなたに攻めこさせる。彼らはつるぎを抜いて、あなたが知恵をもって得た麗しいものに向かい、あなたの輝きを汚し、あなたを穴に投げ入れる。」「このゆえに、おおうことをなすところのケルブよ、われ……火の石の間より汝を滅ぼし去るべし……われ汝を地になげうち汝を王たちの前に置きて観物とならしむべし……汝を見る者の目の前にて汝を地に灰となさん……汝は人のおそれとなり、限りなくうせはてん」(エゼキエル書 28:6-8, 16-19 文語訳)。……

火が天の神のみもとからくだる。地はくずれる。地の深いところに隠されていた武器が引き出される。焼き尽くす炎が、地のすべての裂け目から吹き出す。岩石そのものが火になる。「炉のように燃える日」が来たのである。「天体は焼けてくずれ、地とその上に造り出されたものも、みな焼きつくされる」。(各時代の大争闘下巻 458, 459)

罪を思い出させるただ一つのしるし

「もし正しい者がこの世で罰せられるならば、悪しき者と罪びととは、なおさらである。」(箴言 11:31)

悪人はこの地上で報いを受ける。「万軍の主は言われる、見よ、炉のように燃える日が来る。……その来る日は、彼らを焼き尽して、根も枝も残さない」(マラキ 4:1)。一瞬のうちに滅ぼされる者もあり、多くの日の間苦しむ者もある。みな「彼らの行いにしたがって」罰せられる。義人の罪はサタンに移されたので、サタンは自分自身の反逆の罪だけでなく、神の民に犯させたすべての罪のために苦しむ。彼の受ける刑罰は、彼がだました者たちの刑罰よりずっと重い。サタンの欺きによって堕落した者たちがすべて滅びたのちも、彼はまだ生き残って苦しみを受ける。きよめの火によって、悪人たちは根も枝もついに滅ぼされた。(各時代の大争闘下巻 459, 460)

サタンと、サタンに加わったすべての者は断たれる。……「悪しき者はただしばらくで、うせ去る。あなたは彼の所をつぶさに尋ねても彼はいない」。「彼らは……かつてなかったようになる」(詩篇 37:10, オバデヤ 16)。(各時代の希望下巻 290, 291)

神の正義は応えられ、聖徒たちと天使の群れはみな大きな声でアーメンと言う。

地が神の報復の炎で包まれている間、義人たちは聖なる都の中で安全にとどまっている。第一の復活にあずかる者は、第二の死は何の力もない(黙示録 20:6)。神は悪人に対しては焼き尽くす火であるが、神の民にとっては日であり、盾である(詩篇 84:11)。(生き残る人々 481)

悪人たちを焼き尽くす火が地をきよめる。あらゆる災いの跡は一掃される。地獄の火が永遠に燃え続けて、贖われた者たちの前に罪のおそるべき結果をいつまでも示す、などというようなことはないのである。

思い出させるものがただ一つある。われわれの救い主は、永遠に十字架の傷跡をとどめられるのである。……(各時代の大争闘下巻 460-462)

罪によって失われたいっさいのものは回復された。……地上が贖われた者たちの永遠のすみかとなる時、地を創造された時の神の最初の目的が達成される。「正しい者は国を継ぎ、とこしえにその中に住むことができる」(詩篇 37:29)。(同上 462, 463)

わたしたちは王族に属している

「愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである。」(ヨハネ第一3:2)

神の息子、天の王の子供、王家の一族になるという名誉に匹敵するような地上の誉れがあるだろうか。……地上の貴族は人間でしかない。彼らは死に、ちりに帰る。自分たちのほまれや名誉に、永遠に続く満足はない。しかし神から来る名誉は永遠に続く。神の相続人、またキリストと共同の相続人となるということは、計り知れない富―地上の金銀、宝石も全く無意味なものになるほど比類のない宝―が与えられるということなのである。(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1884 年 6 月 10 日)

み父と御子イエス・キリストとの交わりに入れて戴くということは、高貴にされ、高められることであり、言い表すことのできない喜びと満ち満ちた栄光に預かる者となることである。食物や衣服、また地位や富はそれぞれに価値がある。しかし神と交わりを持つということ、神の聖なるご品性にあずかる者になるということは、計り知れない価値のあることである。わたしたちの生涯はキリストと共に神のうちに隠されるべきであり、「どうなるのか、まだ明らかではない」「わたしたちの命であるキリストが現れる時」「わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである。」クリスチャンの品性の尊い気高さは太陽のように輝き出、キリストのみ顔から流れ出る光の光線は、キリストが純潔であられるように、自らを純潔にした者に反映する。神の子となる特権は、たとえわたしたちが持っているすべての物、すなわち命でさえ犠牲にしたとしても、安価なものである。(教会への証 4 巻 357)

ヨハネが死をまぬがれない身分で神の栄光を見た時、倒れて死人のようになった。彼はその光景に耐えることができなかった。しかし神の子らが不死を身にまとうとき、彼らは「そのまことの御姿を見る」のである。彼らは御座の前に立ち、愛するお方に受け入れられるのである。彼らの罪はすべて消し去られ、その違反は取り去られる。今や神の御座の栄光をはっきりと見上げることができるのである。彼らはキリストの苦しみにあずかる者であった。だから贖いの計画にも主と共に働く者になって、神の王国で、永遠にわたって神をほめたたえるために救われた魂を主と共に見る喜びにもあずかるのである。(同上 9 巻 285)

満足を与える仕事

「そこで、イエスは彼らに答えられた、『わたしの父は今に至るまで働いておられる。わたしも働くのである』。(ヨハネ 5:17)

天国は興味深い活動の場である。その上、疲れた者、重荷を負った者にとって、また信仰の良き戦いを戦った者にとって、栄光にみちた休息の場である。なぜなら不死の若さと活力が彼らのものとなり、これらの活力にあふれた働き人たちにとって、永遠に怠惰な状態でいると退屈になってしまうであろう。そうなればそこは彼らにとって天国ではなくなる。(家庭の教育 378)

エデンに住むアダムとエバには、「それを手入れし、守るために」園の管理が任せられた。彼らの仕事は、たいくつなものでなく、楽しく爽快なものであった。神は、頭脳を活動させ、身体を強壮にし、能力を発達させるために、労働を祝福として人間にお与えになった。知的、また体的に活動することが、アダムの清い存在の最高の楽しみの一つであった。……労働には、労苦や苦痛が伴うからといって、労働をのろいとみなすものは誤っている。金持ちは、しばしば、労働階級を軽べつして見下すが、それは、神が人間を創造された目的から全くはずれている。どんなに多くの富を所有している人であっても、祖先のアダムに与えられた嗣業と比較すれば、いったいどれほどのものであろうか。しかし、アダムは怠惰でなかった。人間の幸福をもたらすものが何であるかを知っておられた創造主は、アダムに仕事をあてがわれた。働く男女だけが、生活の真の喜びを発見する。(人類のあけぼの上巻 25, 26)

天国では労働が絶えずなされている。そこには怠け者はいない。「わたしの父は今に至るまで働いておられる。わたしも働くのである」とキリストは仰せになった。わたしたちは最後の勝利を得て、またわたしたちのために用意された住居に入るとき、怠惰が自分たちの受くべき分となること、すなわち祝福に満ちた何もしない状態で休むようになるとは思えないのである。(レビュー・アンド・ヘラルド 1898 年 5 月 17 日)

神はすべての者が働き人であるよう計画しておられる。重い荷を負って、骨折って働いている獣は怠惰な人間よりも、創造の目的によく応えている。神は絶えず働いておられる。天使たちも働く者である。彼らは人の子らに奉仕するものである。活動のない天国を期待して待つ者は失望するであろう。なぜなら天の法則は怠惰になる余地を与えないからである。しかし疲れた者、重荷を負った者にとっては休息が約束されている。忠実な僕たちは自分たちの労苦から主の喜びへと迎えられるのである。(両親、教師、生徒への勧告 280)

新天新地

「このように、これらはみなくずれ落ちていくものであるから、神の日の到来を熱心に待ち望んでいるあなたがたは、極力、きよく信心深い行いをしていなければならない。その日には、天は燃えくずれ、天体は焼けうせてしまう。 しかし、わたしたちは、神の約束に従って、義の住む新しい天と新しい地とを待ち望んでいる。」(ペテロ第二 3:11-13)

悪人たちの足は、新しく造られた地を汚すことはない。火が天の神のところから下って来て彼らを滅ぼし、根も枝もともに焼きつくす。サタンが根で、その子供たちが枝である。(初代文集 120)

悪人を焼きつくしたのと同じ神からの火が、全地を清めた。裂けて岩角のけわしい山々は激しい熱に焼けとけた。また、大気もすべての田畑も焼けうせてしまった。こうして、われわれの嗣業が、栄光に輝いて美しくわれわれの眼前に展開された。そして、われわれは、新たにされた全地を受けついだのである。(同上 123, 124)

「わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と地とは消え去り、海もなくなってしまった」(黙示録 21:1)。悪人たちを焼き尽くす火が地をきよめる。あらゆる災いの跡は一掃される。地獄の火が永遠に燃え続けて、贖われた者たちの前に罪のおそるべき結果をいつまでも示す、などというようなことはないのである。(各時代の大争闘下巻 460)

海は友をへだてる。わたしたちと愛する者との間のさまたげである。わたしたちの付き合いは広く非常に深い海で中断させられる。新地にはもう海はなく「こぐ舟」も通り過ぎることはない。昔、神を愛し、仕えた多くの者がガレー船でこぐために鎖でつながれていた。また、残酷な、無情な人々の目的に仕えることを強いられていた。主は彼らの苦しみを同情と思いやりを込めて見ておられた。神に感謝することには、新しく造られた地では、恐ろしい激流も、のみ込む海もなく、間断なくざわめく波もない。(SDA ﾊﾞｲﾌﾞﾙ・ｺﾒﾝﾀﾘｰ [E・G・ﾎﾜｲﾄ・ｺﾒﾝﾄ]7 巻 988)

地上の家郷にある美しいものはすべて、天にある家郷の水晶のような川や緑の牧場、風に揺れる木々の生ける泉、輝いている都と白い衣をまとって讃美する者たちのことを、思い起こさせる。この光景はどんな芸術家でも描くことはできず、有限な人間の舌は描写することのできない美しい世界である。「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神はご自分を愛する者のために備えられた。」(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1882 年 7 月 11 日)

もはや死はない―永遠に！

「（神はすべての）人の目から涙を全くぬぐいとって下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のものが、すでに過ぎ去ったからである。」（黙示録 21:4）

わたしたちが永遠にそこで過ごすために神の国に入る時、この世で会った試練や苦難、また困惑は些細なことになってしまう。（信仰によってわたしは生きる 371）

贖われた者の家郷には涙も葬列も喪も記章もない。「そこに住む者のうちには、『わたしは病気だ』と言う者はなく、そこに住む民はその罪が許される」（イザヤ 33:24）。豊かな幸せが永遠に深まって続くのである。……

祝福された来るべき世のことをこの上なく熱心に考えよう。わたしたちの信仰が暗黒の雲をすべて刺し貫き、世の罪のために死なれたお方を見つめるようにしよう。主はご自分を受け入れ、信じるすべての者にパラダイスの門を開いておられる。主は彼らに神の息子、娘となる力を与えてくださる。自分を耐え難いほどに苦しめる苦難をためになる教訓とし、キリストにあって高い召しという賞のしるしに向かって推し進むよう自分を訓練しよう。主がまもなく来られるという思いで自分を励まそう。この希望がわたしたちの心を勇気づけるように。……

わたしたちは家路についている。そのために死なれたほどにわたしたちを愛して下さっているお方が、わたしたちのために都を建てて下さった。新エルサレムはわたしたちの休息の場である。神の都には悲しみはない。悲しみ泣き叫ぶ声も、希望が砕かれ、愛情を傾けた者が埋葬される葬送歌もこれからは聞かれない。まもなく苦しみの衣は婚宴の衣にとって代わる。まもなくわたしたちは王の戴冠式に臨席する。自分の生涯がキリストと共に隠されていた者、この地上で信仰の良き戦いを戦った者たちは神の王国で贖い主の栄光を反映して輝く。

永遠の命というわたしたちの希望が集中しているそのお方にお目にかかる日はそう遠くはない。主のご臨在により、この世での試練や苦しみは無いも同然となる。……見上げなさい。見上げなさい。そしてあなたの信仰をたえず増し加えなさい。この信仰が、神の都の門に通じている狭い道へとあなたを導くようにさせなさい。この都には贖われた者のために、広々とした、限りない栄光の未来があるのである。（教会への証 9 巻 286-288）

救われた者の嗣業

「わが民は平和の家におり、安らかなすみかにおり、静かな休み所におる。」(イザヤ 32:18)

聖書の中では、救われた者の嗣業が「ふるさと」と呼ばれている(ヘブル 11:1-16 参照)。そこでは天の大牧者イエスが、ご自分の群れを生ける水の源に連れて行ってくださる。いのちの木は月ごとにその実を結び、その葉は万民のために用いられる。水晶のように透きとおった川が永遠に流れ、そのそばにはゆれ動く木々が、主に贖われた者たちのために備えられた道の上に影を投げている。広々とひろがった平野の果ては、美しい丘となって盛りあがり、神の山々が高くそびえ立っている。この平和な平原に、また生ける流れのほとりに、久しい年月の間旅人であり寄留者であった神の民が、そのすまいを見いだすのである。……

そこにおいて、「荒野と、かわいた地とは楽しみ、さばくは喜びて花咲き、」「いとすぎは、いばらに代って生え、ミルトスの木は、おどろに代って生える」(イザヤ 35:1, 55:13)。「おおかみは小羊と共にやどり、ひょうは子やぎと共に伏し、……小さいわらべに導かれ、」「彼らはわが聖なる山のどこにおいても、そこなうことなく、やぶることがない」と神は言われる(イザヤ 11:6, 9)。(各時代の大争闘下巻 463, 464)　そこでは、人類の失われた統治権が回復され、動物たちは、ふたたび人類の支配に服し、猛獣はおとなしくなり、おく病な動物は信頼するようになる。(教育 355)

天のふんいきの中では、苦痛は存在することができない。もはや涙はなく、葬式の行列も喪章もない。「もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のものが、すでに過ぎ去ったからである」(黙示録 21:4)。「そこに住む者のうちには、『わたしは病気だ』と言う者はなく、そこに住む民はその罪がゆるされる」(イザヤ 33:24)。(各時代の大争闘下巻 463, 464)

そこではエデンの生活すなわち田園生活が営まれる。「彼らは家を建てて、それに住み、ぶどう畑を作って、その実を食べる。彼らが建てる所に、ほかの人は住まず、彼らが植えるものは、ほかの人が食べない。わが民の命は、木の命のようになり、わが選んだ者は、その手のわざをながく楽しむからである。」(教育 355)

回復されたエデンの園

「『耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい。勝利を得る者には、神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べることをゆるそう』。」(黙示録 2:7)

エデンの園は、人間がその楽しい道から追われた後も長く地上に残っていた。その入り口は警護の天使が守っているだけで、堕落した人類は、罪の入らなかったときの住居を長い間かいま見ることを許されていた。ケルビムが守っていた楽園の門には、神の栄光があらわれていた。アダムとその子らは、ここに来て神を礼拝した。かつて、神の律法を犯したためにエデンから追放された彼らは、ここで神の律法に従う誓いを新たにした。悪のうしおが全地にみなぎり、人々の悪行の結果、世界が洪水によって滅ぼされることになったときに、エデンの園を造られたみ手は、それを地上から取り去られた。しかし万物が回復されて、「新しい天と新しい地」が出現するとき (黙示録 21:1)、それは、はじめのときよりももっと輝かしく飾られて回復されるのである。

そのとき、神の戒めを守ってきたものは、いのちの木の下で、不死の生気を呼吸する。そして、罪のない世界の住民は、永遠にわたって、この喜ばしい楽園に、罪にのろわれなかった完全な神の創造のみわざの見本を見るとともに人間が創造主の栄光に満ちた計画を成就していたならば、全世界がどのようになったかという見本を見るのである。(人類のあけぼの上巻 52)

アダムに最初の主権が返されたのである。彼は、喜びのあまり我を忘れて、かつて自分の楽しみであった木々、まだ罪を犯さず喜びに満ちていた時に、自分で実を集めたその木々をながめる。彼は、自分の手で整えたぶどうの木、かつて愛し育てた花々を見る。彼の心は、この光景が現実であることを悟る。これが回復されたエデンであること、彼が追放された時よりももっと美しくなったエデンであることを彼は悟るのである。(各時代の大争闘下巻 428)

贖われた者は、長い間失われていたエデンのいのちの木に再び近づくことを許され、最初の栄光に輝く人類の完全な背丈に「成長する」のである (マラキ 4:2 英語訳)。罪ののろいの最後の痕跡が取り除かれ、キリストに忠実に仕える者たちは、知的にも、霊的にも、身体的にも、主の完全な姿を反映して、「われらの神、主のうるわしさ」を着て現われる。ああ、なんというすばらしい贖いであろう。これこそ長い間、語り、熱望し、熱心な期待をもって瞑想してきたが、しかし決して十分には理解できなかったことであった。(同上 424)

永遠の世界の栄光

「あなたはいのちの道をわたしに示される。あなたの前には満ちあふれる喜びがあり、あなたの右には、とこしえにもろもろの楽しみがある。」(詩篇 16:11)

永遠の世界の栄光がわたしの前に開かれている。天国は入るに価するものだとわたしはあなたがたに言いたい。贖われた者や聖天使たち、そして、世の贖い主であられるイエス・キリストとの交わりにふさわしい者となることが、あなたの人生の目的となるべきである。もしわたしたちが天の都をひと目見ることができたなら、わたしたちはもう地上に住みたいと思わなくなるであろう。地球には美しい景色があり、わたしはこれらのきれいな眺めをすべて楽しんでいる。わたしはこれらの景色から創造主を連想する。しかしもしわたしが神を愛し、彼の戒めを守るなら、この世の美よりはるかにまさった、永遠の重い栄光がわたしのために天国に用意されているということをわたしは知っている。(信仰によってわたしは生きる 12 月 24 日)

火で清められた……地はその時……もっと美しくなる。草は生き生きとした緑になり、枯れることはない。バラや百合、その他のあらゆる種類の花がそこにある。これらの花は枯れたり、しぼんだり、その美しさやよい香りを失ったりすることはない。

この地上では恐怖心や恐れを抱くライオンも、その時には小羊と共に伏し、新地に住むすべてのものは平和と調和を保つ。新地の木々はまっすぐ気高く立っていて、かたちが損なわれたものはない。

聖徒たちは頭に栄光の冠をかぶり、手に金の立琴を持つ。彼らは金の立琴をかなで、贖いの愛を歌い、神の美しい讃美の調べをささげる。この世で受けた試練や苦しみは新地の栄光の中では忘れ、消え去ってしまう。(ﾕｰｽ・ｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ 1852 年 10 月 1 日)

地上の家郷にある美しいものはすべて天の家郷の水晶のような川や緑の牧場、風にそよぐ木々と生ける泉、輝く都と白い衣をまとった讃美をする者たちのことをわたしたちに思い起こさせる。この光景はどんな芸術家も描くことはできず、限りある人間の舌は描写することのできない美しい世界である。(今日のわたしの生涯 175)　想像力を働かせて、救われた者の家郷を思い描いてみなさい。そしてその家郷はあなたが最高に想像力を働かせて描くことができるよりも、もっと栄光に満ちた所なのである。(キリストへの道 117, 118)

人間の言葉は義人の受ける報いを表現するには不充分である。その報いを見る者だけが分かるのである。(生き残る人々 430, 431)

新エルサレムの家で

「しかし、あなたがたはわたしの創造するものにより、とこしえに楽しみ、喜びを得よ。見よ、わたしはエルサレムを造って喜びとし、その民を楽しみとする。」(イザヤ 65:18)

そこには栄化された新しい地の首都、新エルサレムがある。それは「主の手にある麗しい冠」「あなたの神の手にある王の冠」である。「その都の輝きは、高価な宝石のようであり、透明な碧玉のようであった。」「諸国民は都の光の中を歩き、地の王たちは、自分たちの光栄をそこに携えて来る」。「わたしはエルサレムを喜び、わが民を楽しむ」と主は言われる。……

神の都には「夜は、もはやない」。休みの必要な者や、休みをほしいと思う者はだれもいない。神のみこころを行ない、そのみ名を賛美するのに、疲れることがない。いつも朝のすがすがしさを感じ、それは決して尽きることがない。「あかりも太陽の光も、いらない。主なる神が彼らを照」らされるからである。太陽の光線の代わりに、目にまぶしくない光が与えられるが、その明るさは今の真昼の輝きよりもはるかにまさっている。神と小羊の栄光は、衰えることのない光をもって神の都に満ちあふれる。贖われた者たちは、太陽のない、しかもとこしえの昼の光の中を歩むのである。

「わたしは、この都の中には聖所を見なかった。全能者にして主なる神と小羊とが、その聖所なのである」。神の民は天父とみ子とに自由に交わる特権がある。「わたしたちは、今は、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている」。われわれは神のみ姿が、自然界のみ業と人間に対する神の取り扱いとに反映しているのを、ちょうど鏡の中に見るように見ている。しかしその時には、中間にうすぐらい幕をはさまずに、顔と顔とを合わせて神を見る。われわれは神のみ前に立ち、そのみ顔の栄光を見るのである。(各時代の大争闘下巻 464, 465)

そこではわれわれが知られているようにわれわれも知るであろう。そこでは神が人の魂に植えつけられた愛と同情心が最も真実に最も美しく発揮されるであろう。聖者たちとの清い交際、聖なる天使たちや各時代の忠誠な人々との円満な社交生活、天と地の全家族を一つに結びつける交際―こうしたことのすべてが来世の生活の中にあるのである。(教育 358)

永遠の嗣業

「光のうちにある聖徒たちの嗣業にあずかるわたしたちに資格を与えて下さった父なる神に、感謝することである。」(コロサイ 1:12　改訂標準訳聖書)

身代金は支払われたので、すべての者にとって神のもとへ来ることが可能であり、従順な生涯を通して、永遠の命を得ることも可能である。人が永遠の嗣業から背を向けて離れ、自尊心を満足させ、利己心や見せびらかしのために生活して、……この世と来世の両方で得られるはずの祝福を失ってしまうとは何と悲しいことであろうか。彼らは天のみ使いたち、そして神の王子たちと交わることができるはずである。けれども信じられないことに彼らは天の魅力に背を向けるのである。

全世界の創造主が、ご自分のひとり子を個人的な救い主として信じる者を、御子を愛されるように愛すると申し出て下さっている。現在、地上においてさえも神の恵み深い好意は驚くほどの範囲までわたしたちに与えられている。神は人間に、光であり、天の王であるお方を賜物として与え、このお方と共に天の宝をすべて授けてくださった。神は来世での命をわたしたちに約束して下さったが、その上この世でも素晴らしい賜物を授けて下さる。そして神の恵みの民として、わたしたちの品性を気高くし、広げ、高めるあらゆることをわたしたちが楽しむことを望んでおられる。わたしたちが天にある神の宮廷にふさわしい者となることが神のご計画である。

しかしサタンは人の魂を求めて戦っている。……彼は人が将来の名誉、天の住民となる者のためにたくわえてある永遠の栄光をちらりとでも見ることを望まない。また天国での幸福の前触れを示す経験を人が味わうのを喜ばないのである。……

キリストを自分の救い主として受け入れる者は現世と来世での命を約束される。……キリストの弟子のうち最も身分の低い者も天の住民、朽ちることなく、あせることのない嗣業に対する神の相続人となれるのである。ああ、すべての者が天の賜物を選び取って、どのような破壊者からも安全に守られ、終わりのない世界の嗣業の相続人となれば良いのに。ああ、世を選ぶのではなく、もっと良い嗣業を選べば良いのに。キリスト・イエスにあっての高い召しの賞を求めて、目標に向かってあなたの道を押し進みなさい。(ｸﾘｽﾁｬﾝ教育の基礎 234, 235)

勝利する教会

「またわたしは、火のまじったガラスの海のようなものを見た。そして、このガラスの海のそばに、獣とその像とその名の数字とにうち勝った人々が、神の立琴を手にして立っているのを見た。」(黙示録 15:2)

今日、教会は軍隊であって、わたしたちは暗黒の世界、ほとんど全部が偶像礼拝に身をささげている社会に当面している。しかし、戦いが終り、勝利をかち得る日がきている。神のみこころが天に行われるとおり、地にも行われなければならない。救われた民は天の律法のほかには、どんな律法も守ることはなく、すべての人が幸福な、一つに結ばれた家族となり、感謝と賛美の衣、すなわちキリストの義の衣をまとい、自然はすべて、そのすばらしい美の中に神を賛美し、礼拝するのである。世界は天の光をあび、月の光は日の光ようになり、日の光は今の七倍の光を放つにいたる。喜びのうちに年は進み、その光景を見て、あけの明星はともに歌い、神の子は喜びの声をあげるのである。そして、神とキリストが声を合わせて、「もはや罪もなく、死もない」と宣言されるのに和する。……

永遠の門口に立ち、恵み深い招待の声を聞きなさい。それはこの地上でキリストのために苦しむことを特権とし、名誉と思い、キリストと協力した人に与えられる恩恵の招待である。彼らはみ使と共にあがない主の足もとに自分の冠を投げ出し、「ほふられた小羊こそは、力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、さんびとを受けるにふさわしい。」「み座にいますかたと小羊とに、さんびと、ほまれと、栄光と、権力とが、世々限りなくあるように」と叫ぶのである (黙示録 5:12, 13)

ここにおいてあがなわれた人たちは十字架にかけられた救い主に自分らを導いてくれた人と対面し、彼らは一つとなって、人間が神の生命と同じ生命を持つことができるために死なれた救い主を賛美する。戦いは終結し、すべての災も争いも終りを告げ、あがなわれた者が神のみくらのまわりに立つ時、勝利の歌は全天に満ちあふれ、「ほふられた小羊こそは」われらを神にあがなってくださった「小羊こそは、……栄光と、さんびとを受けるにふさわしい」と喜びの曲を歌うのである。(ﾐﾆｽﾄﾘｰ・ｵﾌﾞ・ﾋｰﾘﾝｸﾞ 492, 493)

思いがけない報酬

「だれでも良いことを行えば、……それに相当する報いを、それぞれ主から受けるであろう。」(エペソ 6：8)

この世での神のための働きがほとんど実を結ばないように思えることが度々ある。善を行う自分たちの努力が、熱心で辛抱強いものであっても、その結果を見ることは許されないかもしれない。その努力がわたしたちにはむなしいものに思えるかもしれない。しかし救い主は、わたしたちの働きは天に記されており、その報酬がなくなることはないと保証しておられる。(教会への証 6 巻 305)

主の宝庫に二枚のレプタを入れた貧しいやもめは自分がしていることの意味がほとんど分かっていなかった。彼女の自己犠牲の模範は各時代にわたって、またあらゆる地において何千もの心に実行に移させ、またその行いをくり返させている。身分の高い者も低い者も、富む者も貧しい者も、主の宝庫へ捧げものを携えてきている。この捧げ物が伝道を支え、病院を設立し、飢える者を食べさせ、裸な者を着せ、病人を癒し、貧しい者に福音を宣べ伝える助けとなるのである。やもめの無私の行為を通して多くの者が祝福されている。そして神の日に、彼女は自分が感化を与えたこれらの行為すべての仕上げがどのようなものになったかを見ることを許される。救い主へのマリヤの高価な贈り物についても同じである。石膏のつぼを壊した記録によって、どれほど多く者が愛の奉仕をすることを励まされたことであろうか。そしてこれらのすべてのことを見るとき、彼女はどれほど嬉しく思うであろうか。(同上 310)

「よく聞きなさい。全世界のどこでも、この福音が宣べ伝えられる所では、この女のした事も記念として語られるであろう」(マタイ 26:13)。将来をごらんになって、救い主は、福音について確信をもって語られた。 福音は全世界にのべ伝えられるのであった。そして、福音がひろがるかぎりどこまでも、マリヤの献げ物はその かおりを放ち、人々の心は彼女の自然に発した行為によって恵まれるのであった。国々は起り、そして倒れるで あろう。君主たちと征服者たちの名前は忘れられるであろう。しかしこの婦人の行為は、聖史のページに永久に 残るであろう。世にあるかぎり、あの割られた香油のつぼは、堕落した人類に対する神の豊かな愛の物語を告げるのである。(各時代の希望中巻 387, 388)

人を善と神とに導く聖霊の推進力はすべて天の書物に記される。そして聖霊の働きのための道具として自分を捧げた者は、みな神の日に、自分の生涯がなしたことを見るのを許されるであろう。(教会への証 6 巻 310)

新地での活動

「彼らは家を建てて、それに住み、ぶどう畑を作って、その実を食べる。 彼らが建てる所に、ほかの人は住まず、彼らが植えるものは、ほかの人が食べない。わが民の命は、木の命のようになり、わが選んだ者は、その手のわざをながく楽しむからである。」(イザヤ 65：21, 22)

わたしたちが最後の勝利を得て、またわたしたちのために用意された住居に入るとき、怠惰が自分たちの受くべき分となること、すなわち祝福に満ちた何もしない状態で休むようになるとは思えないのである。 (ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1898 年 5 月 17 日)

贖われた人々は新しい地において、最初アダムとエバに幸福をもたらした仕事と楽しみに従事する。彼らは エデンの生活をする。それは楽園と畑の生活である。「彼らは家を建てて、それに住み、ぶどう畑を作って、そ の実を食べる。彼らが建てる所に、ほかの人は住まず、彼らが植えるものは、ほかの人が食べない。わが民の命 は、木の命のようになり、わが選んだ者は、その手のわざをながく楽しむからである」(イザヤ 65：21, 22)。(国と指導者下巻 333)

そこでわたしは、実に輝かしい家々を見た。それらは銀のように見え、美しい真珠をちりばめた四本の柱に支えられていた。これには聖徒たちが住むのであった。どの家にも黄金の棚があった。多くの聖徒たちが家の中に入って行って光輝く冠を脱いで棚の上に置き、それから家のそばにある畑へ出て行って土を扱うのをわたしは見た。それは、地上のわれわれがしなければならないこととは全く違っていた。輝く光が彼らの頭の周りを照らし、彼らは絶えず声をあげて、神を賛美していた。(初代文集 68)

すべての才能が発達し、すべての能力が増大する。知識を獲得するのに、頭脳を疲れさせたり、精力を使いきってしまったりするようなことはない。そこではどんな大きな企画も実行され、どんな遠大な抱負も達成され、どんな大望も実現される。そしてそれでもなお、越えるべき新しい高いところ、感嘆すべき新しい驚異、理解すべき新しい真理、頭と心と体の能力を呼び起こす新たな対象が現われてくる。(各時代の大争闘下巻 466)

比べることのできない音楽

「主にあがなわれた者は帰ってきて、その頭に、とこしえの喜びをいただき、歌うたいつつ、シオンに来る。彼らは楽しみと喜びとを得、悲しみと嘆きとは逃げ去る。」(イザヤ 35:10)

そこには音楽と歌がある。それは神の幻の中以外には人間の耳に聞いたことも心に思ったこともないような音楽である。

「歌う者と踊る者はみな言う。」「彼らは声をあげて喜び歌う。主の威光のゆえに、西から喜び呼ばわる。」「主はシオンを慰め、またそのすべて荒れた所を慰めて、その荒野をエデンのように、そのさばくを主の園のようにされる。こうして、その中に喜びと楽しみとがあり。感謝と歌の声とがある。」(教育 358)

わたしは天国の秩序、完全な秩序を示された。そして、そこでの完全な音楽を聞いた時うっとりした。幻から覚めた後では、地上の歌声は非常に耳にさわり、不調和に聞こえた。手に金の立琴を持ち、周りを取り囲むように立っている天使たちはわたしを見た。立琴の先端には立琴を調律し、また音色を変える器具がついていた。天使たちの指は不注意にかなでるのではなく、それぞれの音を出すためにそれぞれの糸にふれた。常に指揮をする天使が一人いて、初めに立琴にふれ、調べを弾き始める。それからすべての者が完全で豊かな天の音楽をかなでるのである。これを描写することはできない。それは美しい調べであり、神々しい、この世ならぬものであって、すべての顔にはイエスのみ姿が反映しており、言うに言われぬ栄光に輝いていた。(教会への証 1 巻 146)

主に贖われた者が会う時にはなんと素晴らしい讃美が満ちることであろうか。……全天は豊かな調べと、小羊を讃美する歌で満ちあふれる。栄光の王国に、救われた者、永遠に救われた者がいるのである。神の命のような命を得るということが報いである。(SDA ﾊﾞｲﾌﾞﾙ・ｺﾒﾝﾀﾘｰ [E・G・ﾎﾜｲﾄ・ｺﾒﾝﾄ]7 巻 982)

ことばというものはあまりに貧弱で、天国の光景を描写することができない。天国の光景がわたしの前に現れるにつれて、わたしはただ驚嘆するよりほかはない。そのすぐれた壮麗さと、そのすばらしい栄光に心を奪われたわたしは、筆を投げて叫んだ。「ああ、なんという愛！ なんという驚くべき愛ぞ」と。どんなことばでほめたたえてみても、天の栄光と比類のない救い主の愛の深さを描写することはできない。(初代文集 466)

わたしたちの救い主の最高の栄誉

「もし、人が彼に『あなたの背中の傷は何か』と尋ねるならば、『これはわたしの友だちの家で受けた傷だ』と、彼は言うであろう」。(ゼカリヤ 13:6)

「わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と地とは消え去り、海もなくなってしまった」(黙示録 21:1)。悪人たちを焼き尽くす火が地をきよめる。あらゆる災いの跡は一掃される。……

思い出させるものがただ一つある。われわれの救い主は、永遠に十字架の傷跡をとどめられるのである。主の傷ついたみ頭に、その脇腹に、その手と足に、罪の残酷なしわざの唯一の跡がある。預言者ハバククは栄光のキリストを見て、「その光は彼の手〔脇腹—英語訳〕からほとばしる。かしこにその力を隠す」と言っている(ハバクク書 3:4)。人類を神に和らがせる真紅の血潮がほとばしり出た、主の突き通された脇腹—そこに救い主の栄光があり、そこに主の力が隠れている。……救い主の屈辱のしるしこそは、救い主の最高の栄誉である。カルバリーの傷跡は永遠にわたって、主への賛美を示し、主の力を宣言する。(各時代の大争闘下巻 460-462)

キリストの十字架は、永遠にわたって、贖われた者たちの科学となり歌となる。栄光につつまれたキリストのうちに、彼らは、十字架につけられたキリストを見る。広大な空間に、数えきれないほどの諸世界を、その力によって創造し、支えておられるおかた、神の愛するみ子、天の大君、ケルビムや輝くセラピムが喜んであがめるおかた、そのおかたが、堕落した人類を救うために身を卑しくされたことは、決して忘れられることがない。また彼が、罪の苦痛と恥とを負われ、天父からはそのみ顔を隠されて、ついには失われた世界の苦悩がその心臓を破裂させて、カルバリーの十字架上でその命を絶たれたことは、決して忘れられることがない。諸世界の創造者、すべての運命の決定者が、人類に対する愛から、ご自分の栄光を捨てて、ご自分を卑しくされたことは、いつまでも宇宙の驚嘆と称賛の的となる。救われた諸国民が、贖い主を見て、そのみ顔に天父の永遠の栄光が輝いているのをながめるとき、また、永遠から永遠にいたるイエスのみ座をながめ、イエスのみ国には終わりがないことを知るとき、彼らはどっと歓喜の歌声をあげて、「ほふられた小羊、ご自身の尊い血によって、わたしたちを神に贖って下さったおかたは、賛美を受けるにふさわしい、賛美を受けるにふさわしい」と叫ぶのである。(同上 433, 434)

来世の学校

「見よ、神のすまいは人と共にある。神は彼らと共に住まわれる。」(黙示録 21:3 改訂標準訳聖書)

天地が造られたときにエデンに設けられた学校と、来世のエデンの学校との間には、人類の堕落と苦難、神の犠牲、死と罪に対する勝利など、この世の歴史の全範囲が横たわっている。エデンの最初の学校の事情がそのまま来世の学校にみられるとはかぎらない。そこには誘惑の機会を与える善悪の木はなく、誘惑者もいなければ、悪の可能性もない。どの人もみな悪の試練にうち勝った人ばかりで、もはや悪の力に動かされる者はひとりもない。……

神のみ前に立ち帰った人類は、天地が造られた時と同じようにふたたび神から教えられる。(教育 352-354)

地上での終生の仕事は永遠の生命への準備であり、地上で始まった教育はこの世で完成するものではない。それは永遠に続き、たえず進歩し、決して終ることがない。(ﾐﾆｽﾄﾘｰ・ｵﾌﾞ・ﾋｰﾘﾝｸﾞ 449)

地上の学校で学ぶあらゆる正しい原則、またあらゆる真理はわたしたちを天の学校にふさわしくなるように向上させる。キリストは、地上での公生涯の間弟子たちと共に歩き、話されたように、天の学校でわたしたちを教えてくださる。わたしたちを生ける水の流れのほとりに導き、この世では罪によってひどく傷つけられたために、人間の限りある知力では隠された神秘となっていた真理を説き明かしてくださる。(両親、教師、生徒への勧告 208, 209)

罪の起源、破滅的な虚偽と不正な働き、……誤りを征服してきた真理―それらのすべての歴史が明らかにされるであろう。目に見える世界と目に見えない世界をさえぎっていたヴェールが取り除かれて、ふしぎに思われていた事がらが明らかにされるであろう。(教育 355, 356)

すべての才能が発達し、すべての能力が増大する。知識を獲得するのに、頭脳を疲れさせたり、精力を使いきってしまったりするようなことはない。そこではどんな大きな企画も実行され、どんな遠大な抱負も達成され、どんな大望も実現される。そしてそれでもなお、越えるべき新しい高いところ、感嘆すべき新しい驚異、理解すべき新しい真理、頭と心と体の能力を呼び起こす新たな対象が現われてくる。(各時代の大争闘下巻 466)

キリストがわたしたちの教師となられる

「わが民はわが名を知るにいたる。その日には彼らは……語る者がわたしであることを知る。わたしはここにおる（見よ、それはわたしである）。」（イザヤ 52:6）

神のみ前に立ち帰った人類は、天地が造られた時と同じようにふたたび神から教えられる。（教育 354）

わたしたちの前にその時何が開かれるのか、わたしたちにはほとんど見当もつかない。わたしたちはキリストと共に命の川のほとりを歩く。主は自然の美と栄光をわたしたちに明らかにしてくださる。そしてありのままのご自身をわたしたちにあらわされ、ご自分に対するありのままのわたしたちを示される。能力に限界があるために今は分からない真理が来世では分かるようなる。（両親、教師、生徒への勧告 162）

来るべき世界で、キリストは贖われた人々を命の川のほとりに導き、真理の素晴らしい教訓をお教えになる。主が自然の神秘を開かれるので、人々は主のみ手が世界を秩序正しく支えていることを知る。野の花を彩る偉大な芸術家であられるお方の表現技術をまのあたりにし、光の光線をあらゆる方向に注がれる慈愛に満ちたみ父の御目的を学ぶ。そして天使たちと共に、感謝の讃美を歌うことにより、恩知らずの世界に対する神の至上の愛を認めるのである。（今日のわたしの生涯 361）

そこでは無限の広さと言いあらわし得ない価値を持った歴史が生徒の前に開かれるであろう。……罪の起源、破滅的な虚偽と不正な働き、まっすぐな道からそれることなく誤りを征服してきた真理―それらのすべての歴史が明らかにされるであろう。目に見える世界と目に見えない世界をさえぎっていたヴェールが取り除かれて、ふしぎに思われていた事がらが明らかにされるであろう。（教育 355, 356）

言いしれない喜びをもってわれわれは他世界の聖者たちの歓喜と知恵にあずかるのである。われわれは、聖者たちが神のみ手のわざを熟視して長い年月の間に得た宝にあずかるのである。そして永遠の年月がたつにつれて、ますます輝かしい啓示が与えつづけられるであろう。「わたしたちが求めまた思うところのいっさいを、はるかに越え」るものが、永遠から永遠にわたって神の賜物として与えられるであろう。（同上 359）

永遠にわたって神と共に住むことができるように、わたしたちはこの地上で教育を受けなければならない。わたしたちがここで始める教育は天国で完成する。わたしたちは天の高等学校に入るのである。（今日のわたしの生涯 361）

来るべき世々での学び

「それは、キリスト・イエスにあってわたしたちに賜わった慈愛による神の恵みの絶大な富を、きたるべき世々に示すためであった。」(エペソ 2:7)

贖いの科学は科学中の科学である。天使が学んでいる科学であり、堕落していない世界に住む知性のある者が学んでいるもの、わたしたちの主である救い主の注意を引きつける科学であって、「永遠にわたって沈黙を守っておられる」無限のお方の心が抱かれた目的に添った科学であり、無限に続く、神に贖われた者の研究となるものである。これは人がたずさわることのできる研究のうちでもっとも高度な研究であり、他のどのような研究も人の精神をこれほど活気づかせ、魂を高めることはできない。……

贖いという主題は、天使もうかがい知ることを願っている主題であり、永遠にとぎれることなく、贖われた者の科学となり歌となる。この主題は現在でも注意深く熟考し、研究する価値があるのではないだろうか。……

キリストの受肉と贖いの犠牲そしてとりなしの働きについての研究に、勤勉な学生は時の続く限り心を傾ける。そして数え切れない年月において天を眺め、「確かに偉大なのは、この信心の奥義である」と叫ぶのである。

この世で得ることのできる啓発を受け入れるなら、その啓発はわたしたちの理解力を開いてくれるということをわたしたちは永遠に学ぶ。贖われた者の心と精神と舌は、いつまでも変わることなく、贖いという主題に専心する。キリストがご自分の弟子たちに明らかにしようと切望されたが、弟子たちには自分のものとする信仰がなかったその真理を贖われた者たちは理解する。そして、永遠に渡って、キリストの完全さと栄光が新たにされるのである。忠実な家長であられるお方は、ご自分の宝庫から新しいものと古いものを永遠にわたって出してこられる。(今日のわたしの生涯 360)

もしも神と神の真理を完全に理解することがわたしたちにとって可能であるなら、それ以上真理を発見したり、もっと偉大な知識を得たり、成長することはない。……神に感謝すべきことには、完全な理解はできないのである。神が無限のお方であり、知恵の宝庫がすべてが神の内にある限り、わたしたちは永遠にわたって神の知恵と善と力の富を探し求め、学んでも、研究し尽くすことはないのである。(ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1906 年 4 月 25 日)

尽きることのない主題

「この救については、あなたがたに対する恵みのことを預言した預言者たちも、たずね求め、かつ、つぶさに調べた。 彼らは、自分たちのうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光とを、あらかじめあかしした時、それは、いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのである。……これは、御使たちも、うかがい見たいと願っている事である。」(ペテロ第一 1:10-12)

この世においては、われわれは、贖いという驚嘆すべきテーマについてほんの初歩のことしか理解できない。辱しめと栄光、いのちと死、公平とあわれみとが、十字架において出会ったことを、われわれの有限な理解力でどんなに熱心に探り調べてみても、そしてわれわれの知力のかぎりを尽くしてみても、われわれはその意味を十分につかむことはできない。贖いの愛の長さ、広さ、深さ、高さは、かすかにしか理解されない。贖いの計画は、贖われた者たちが、見られているように見、知られているように知る時においてさえ、十分には理解されない。そして、永遠にわたって、新しい真理がたえず示されて、心は驚きと喜びに満たされるのである。地上の嘆き、痛み、誘惑は終わり、その原因は除かれても、神の民は、自分たちの救いのためにどんな価が払われたかということについて、はっきりした理解を持ち続けるのである。……

十字架の奥義は、他のすべての奥義を説明する。カルバリーから流れ出る光に照らして見るとき、われわれのうちに恐怖と畏敬の念を満たした神の属性は、美しい、人を引きつけるものに見える。あわれみ、やさしさ、父としての愛情が、聖潔、公平、力と入りまじって見える。われわれは、高くかかげられた神のみ座の威光をながめる一方では、神のご品性の恵み深いあわれみを見て、「われらの父よ」というあの永遠に続く称号の意味を、いままでになく理解するのである。

限りない知恵を持っておられる神は、われわれの救いのためには、み子の死よりほかに方法を考え出すことがおできにならなかった。この犠牲に対する報いは、きよく幸福で不死の身となって贖われた者たちを、地に住まわせるという喜びである。救い主が悪の権力と戦われた結果は、贖われた者たちに与えられる喜びであり、永遠にわたって神にみ栄えを帰することである。魂にはこのように大きな価値があるので、天父は、払われた価に満足される。そして、キリストご自身も、その大きな犠牲の実をごらんになって満足されるのである。 (各時代の大争闘下巻 433, 434)

永遠にわたって、贖われた者の群れは主の最高の栄誉となる。(預言の霊 3 巻 261)

わたしたちの研究分野である宇宙

「主よ、あなたのみわざはいかに多いことであろう。あなたはこれらをみな知恵をもって造られた。地はあなたの造られたもので満ちている。」(詩篇 104:24)

わたしたちは神のみ業と方法の知識をこの世ではほんの初歩しか得ることができない。この研究は永遠にわたって続けられる。神は活動に精神のあらゆる能力をもたらす思想の主題を人のために備えられた。わたしたちは感謝と謝恩に満たされつつ、創造主のご品性を天においてもまた、地においても読み取ることができる。そして、あらゆる神経と感覚が神の驚くべきみ業に見られるその愛の表現に反応する。(教会への証 4 巻 581)

新天新地においては、われわれの眼をくもらせていたヴェールが取り除かれる。顕微鏡でちらっとのぞいた美しい世界がまのあたりになながめられ、望遠鏡を通してはるか遠くに見えた天の栄光がまのあたりに仰がれる。全地は罪の傷あとを取り除かれて主なる神エホバの美しさにつつまれて現われる。そのとき、なんというすばらしい研究の分野がわれわれの眼前に開かれることであろう。そこでは科学の学徒が創造の記録を読んでも悪の法則の名ごりはどこにもみあたらない。自然の声の音楽に耳をかたむけても、嘆きの音いろや悲しみの低音はきかれない。すべての被造物の中に一つの筆跡だけが目につき、広大な宇宙に神のみ名が大きく書かれているのが見えるだけで、地にも海にも空にも悪の面影は何一つ残っていない。(教育 354, 355)

贖われた者の群れは世界から世界へ及ぶ。そして贖いの奥義を調べるために多くの時間を費やす。永遠に続く間この主題は絶えることなく彼らの心を開き続ける。小羊の血と自分の証の言葉によって勝利する者に与えられる特権は理解を超えるほどのものである。(SD Aﾊﾞｲﾌﾞﾙ・ｺﾒﾝﾀﾘｰ [E･G･ﾎﾜｲﾄ・ｺﾒﾝﾄ]7 巻 990)

宇宙のすべての宝は神の子らの研究のために開放される。言いしれない喜びをもってわれわれは他世界の聖者たちの歓喜と知恵にあずかるのである。われわれは、聖者たちが神のみ手のわざを熟視して長い年月の間に得た宝にあずかるのである。そして永遠の年月がたつにつれて、ますます輝かしい啓示が与えつづけられるであろう。「わたしたちが求めまた思うところのいっさいを、はるかに越え」るものが、永遠から永遠にわたって神の賜物として与えられるであろう。(教育 359)

訪問すべき諸世界

「主はこう言われる、『……わたしは手をもって天をのべ、その万軍を指揮した』。」(イザヤ 45:11, 12)

この世と天国の住居が神の世界を構成していると多くの者が考えているようであるが、そうではない。(SDA ﾊﾞｲﾌﾞﾙ・ｺﾒﾝﾀﾘｰ [E･G･ﾎﾜｲﾄ・ｺﾒﾝﾄ]7 巻 990)

神はご自分の戒めに従順な諸世界を持っておられる。これらの世界は創造主の栄光に関して指導を受ける。諸世界の住民は人間を贖うために支払われた大いなる価値を知って、驚きに満たされる。(ﾚﾋﾞｭｰ・ｱﾝﾄﾞ・ﾍﾗﾙﾄﾞ 1900 年 9 月 25 日)

主は、わたしに他世界の光景を見せてくださった。わたしは翼が与えられ、一人の天使とともに都から明るく栄光に輝くところへ行った。そこの草は生き生きとした緑で、そこの鳥は楽しげにさえずっていた。そこには、大きな人もいれば小さな人もいた。彼らは、気高く威厳があり、美しかった。彼らは、イエスの本質の真の姿をしていて、彼らの顔は清い喜びに輝き、その場所の自由と幸福をあらわしていた。

わたしは、彼らの一人に、なぜ彼らは地上の人々よりもそんなに美しいのかをたずねた。すると答えは、「われわれは、神の戒めに厳密に従い、地上の人々のように不服従によって堕落しませんでした」ということであった。それからわたしは二本の木を見た。その一本は、都のなかの命の木のように見えた。両方の木の実は美しく見えたが、その一つを彼らは食べてはならなかった。彼らは両方とも食べることはできたが、その一つは食べることを禁じられていた。そこで、わたしに付き添っていた天使が、「この場所の人はだれも禁じられた木の実を食べてはいません。もし彼らが食べるならば、堕落してしまうのです」とわたしに言った。

それからわたしは、七つの月がある世界へ連れて行かれた。そこでわたしは、生きながら天にあげられたなつかしいエノクに会った。…… わたしは彼が地球から移されたのはここですかと、彼にたずねた。彼は答えて「そうではありません。わたしの家は都にあります。わたしは、ここを訪問しているのです」と言った。彼は全くくつろいだ気持ちでその場所のあちらこちらをたずねていた。

わたしは、わたしに付き添っている天使に、わたしをその場所におらせてくださいとたのんだ。わたしは、この暗い世界にもう一度帰って来ることなどは、とうてい考えることができなかった。そのとき天使は、「あなたは帰らなければなりません。そして、もしあなたが忠実であれば、十四万四千人と共に、すべての他世界を訪問し、神のみ手のわざを見る特権が与えられるでしょう」と言った。(初代文集 102, 103)

新地に関する推測

「彼らが死人の中からよみがえるときには、めとったり、とついだりすることはない。彼らは天にいる御使のようなものである。」(マルコ 12:25)

今日、新地に結婚や誕生があるという信念を話す人がいるが、聖書を信じる者は、そのような教義を受け入れることはできない。新地で子供が生まれるという教義は「預言の確かな言葉」にはない。キリストのみ言葉は間違えようのないほどはっきりしている。このみ言葉は新地における結婚と誕生に関する質問を永久に解決するのである。死からよみがえった者も、生きたまま移される者も結婚したり、結婚関係におかれることはない。神のみ使いたちのように、王家の一員となるのである。

キリストのこのはっきりとした宣言に反対の見解を持つ人々に対して、そのような事柄に関しては沈黙が雄弁であると申し上げたい。神がみ言葉によってわたしたちに知らせておられない事柄に関して、想像や憶測にふけるのは無遠慮である。自分の未来の状態に関して憶測にふける必要はない。……

「み言葉を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても。」材木や干草や切り株、すなわち誰の益にもならないような推測や思索に基礎を置いてはならない。

キリストはわたしたちの救いに不可欠な真理を差し控えたりはなさらない。明らかにされていることはわたしたちとわたしたちの子孫のためである。しかし、表されていない事柄に関して教義を組み立てるために想像を働かせることは許すべきではない。(医事伝道 99, 100)

霊的な作り話が多くの者をとりこにするということがわたしに示されている。……このような汚れた空想にふけっているすべての人に申し上げたい。止めなさい。キリストのためにすぐに止めなさい。あなたは禁じられた場所にいる。(同上 101)

主はわたしたちの来世での幸福のためにあらゆる準備をして下さっている。しかし、これらの計画に関して、啓示はしておられない。だからその事に関して思いめぐらせるべきではない。わたしたちはこの世の状態によって、来世の状態を推し量るべきでもないのである。(同上 100)

キリストの愛の王国

「国と主権と全天下の国々の権威とは、いと高き者の聖徒たる民に与えられる。彼らの国は永遠の国であって、諸国の者はみな彼らに仕え、かつ従う』。」(ダニエル 7:27)

キリストの王国の統治は地上の統治のようなものではない。それは王国を構成する者の品性のあらわれである。……その宮廷では聖なる愛が主人役を勤め、その役目と任務は無我の愛で行われることにより美しくされる。キリストはご自分の僕にむかって、自分の役目である働きのすべてに憐れみと慈愛に満ちた親切をもたらすように命じられる。……

神の王国でキリストと共に新しい命にあずかる者がすべて経験しなければならない、心と精神における改変の働きがおできになるのはキリストの御力だけである。……キリストに正しく奉仕するために、わたしたちは神の御霊によって生まれなければならない。このことにより、心は清められ、精神は新しくなり、神を知って、愛する新しい能力がわたしたちに与えられる。神のあらゆるご要求に従う意志をわたしたちに与えてくださる。これが真の礼拝である。(天国で 372)

「あなたの目は平和なすまい、移されることのない幕屋エルサレムを見る。その杭はとこしえに抜かれず、その綱は、ひとすじも断たれることはない。 主は威厳をもってかしこにいまし、われわれのために広い川と流れのある所となり、…… 主はわれわれのさばき主、主はわれわれのつかさ、主はわれわれの王であって、われわれを救われる。…… そこに住む者のうちには、『わたしは病気だ』と言う者はなく、そこに住む民はその罪がゆるされる」(イザヤ 33:20-24)。

「しかし、あなたがたはわたしの創造するものにより、とこしえに楽しみ、喜びを得よ。見よ、わたしはエルサレムを造って喜びとし、その民を楽しみとする。わたしはエルサレムを喜び、わが民を楽しむ。泣く声と叫ぶ声は再びその中に聞えることはない。…… 彼らは家を建てて、それに住み、ぶどう畑を作って、その実を食べる。 彼らが建てる所に、ほかの人は住まず、彼らが植えるものは、ほかの人が食べない。わが民の命は、木の命のようになり、わが選んだ者は、その手のわざをながく楽しむからである。……彼らはわが聖なる山のどこでもそこなうことなく、やぶることはない」と主は言われる (イザヤ 65:18-25)。(同上 372)

来世での安息日

「『わたしが造ろうとする新しい天と、新しい地がわたしの前にながくとどまるように、あなたの子孫と、あなたの名はながくとどまる』と主は言われる。『新月ごとに、安息日ごとに、すべての人はわが前に来て礼拝する』と主は言われる。」(イザヤ66:22, 23)

世の始めに、天父とみ子は、創造の働きののちに安息日を休まれた。「天と地と、その万象とが完成した」とき、創造主は天のすべての住民とその輝かしい光景をながめてよろこばれた(創世記 2:1)。「かの時には明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわった」のであった(ヨブ記 38:7)。……「神が聖なる預言者たちの口をとおして、昔から預言しておられた万物更新の時」になっても、創造の安息日、すなわちイエスがヨセフの墓で休まれたこの日は、やはり休息とよろこびの日となるのである(使徒行伝 3:21)。救われた諸国の民が「安息日ごとに」よろこびの礼拝をもって神と小羊を拝するとき、天と地は声を合わせて賛美するのである(イザヤ書 66:23)。(各時代の希望下巻 293, 294)

救われた諸国の人々は、天の律法のほかはどんな律法をも認めない。すべての者は賛美と感謝の衣服を着て、幸福な一致した家族となる。その光景に「明けの星は相共に歌い、神の子たちはみな喜び呼ばわ」る。……

『新月ごとに、安息日ごとに、すべての人はわが前に来て礼拝する』と主は言われる。』「こうして主の栄光があらわれ、人は皆ともにこれを見る。」「主なる神は義と誉とを、もろもろの国の前に、生やされる。」「その日、万軍の主はその民の残った者のために、栄えの冠となり、麗しい冠となられる」。(国と指導者下巻 334, 335)

天と地がつづくかぎり、安息日は、創造主の力のしるしとしてつづくのである。そしてエデンがふたたびこの地上に栄えるときに、神の聖なる休日は、天下のすべての者によってあがめられるのである。安息日ごとに、輝く新天地の住民は「わが前に来て礼拝する」と主は言われる(イザヤ書 66:23)。(各時代の希望上巻 363)

永遠の安全

「主は全地の王となられる。その日には、主ひとり、その名一つのみとなる。」(ゼカリヤ 14:9)

贖罪の大いなる計画は、この世界を完全に神の恵みのもとに引きかえす。罪によって失われたすべてのものが回復される。人間ばかりでなく、地も贖われて、従順な者たちの永遠のすみかとなる。六千年のあいだ、サタンは地の所有を維持しようと努力してきた。だが、今や創造当初の神のみ旨が完成される。「いと高き者の聖徒が国を受け、永遠にその国を保って、世々かぎりなく続く」(ダニエル 7:18)。

「日いずるところから日の入るところまで、主のみ名はほめたたえられる」(詩篇 113:3)。「その日には、主ひとり、その名一つのみとなる。」「主は全地の王となられる」(ゼカリヤ 14:9)。……「すべてのさとしは確かである。これらは世々かぎりなく堅く立」つ。サタンが憎んで滅ぼそうとした聖なるおきては、罪のない宇宙であがめられる。(人類のあけぼの上巻 403)

キリストのあがないの働きによって神の統治の正しいことが証明される。全能者は愛の神として知られる。サタンの非難は反ばくされ、その性格がばくろされる。反逆はふたたび起ることができない。罪は二度とこの宇宙にはいることができない。永遠にわたって、だれも背信の心配がない。愛の自己犠牲によって、天と地の住民は決してきれることのないきずなで創造主にむすびつけられる。……

罪の充満していたところに神の恵みがもっと充満する。サタンが自分の働き場所として主張していたこの地上そのものも、ただあがなわれるばかりでなく、また高められるのである。罪ののろいのために神の輝かしい創造における一つの汚点となっていたわれわれのこの小さな世界が、神の宇宙のどんな他世界にもまさってあがめられる。神のみ子が人のかたちをとり、栄光の王が生活し、苦難を受け、死なれたこの地上―ここに神が万物を新たにされる時、「神の幕屋が人とともにあり、神が人とともに住み、人は神の民となり、神みずから人とともにいま」すのである。そして永遠にわたって、あがなわれた者は、神の光の中を歩むとき、言いあらわしようのない神の賜物であられるインマヌエル―神われらと共にいます―について神を賛美するのである。(各時代の希望上巻 12, 13)

贖われる者のためにある永遠

「わたしは長寿をもって彼を満ち足らせ、わが救を彼に示すであろう。」(詩篇 91:16)

宇宙のすべての宝は、贖われた神の民が研究するために開放される。死ぬべき人間という拘束をうけないで、彼らは、はるかに遠い他世界―人間の悲惨な光景を見て悲しみに身を震わせ、一人の魂が救われた知らせに歓喜の歌をひびかせた他世界―へ、疲れも覚えず飛行する。言葉では言い尽くすことのできない喜びをもって、

地上の子らは、他世界の住民たちの喜びと知恵にあずかる。世々にわたって神のみ手の業を熟視して得られた知識と悟りの宝に、彼らは共にあずかる。くもりのない目をもって、彼らは創造の栄光を見つめる。すなわち、もろもろの太陽や星や天体が、おのおのその定められた軌道を通って、神のみ座の周囲を運行しているのを見るのである。最も小さなものから最も大きなものに至るまで、すべてのものの上に、創造主のみ名が書きしるされ、すべてのものらの中に神の力の富が示されている。

永遠の年月が経過するにつれて、神とキリストについてますます豊かでますます輝かしい啓示がもたらされる。知識が進歩していくように、愛と尊敬と幸福も増していく。人々は神について学べば学ぶほど、ますます神のご品性に感嘆するようになる。イエスが彼らの前に、贖いの富と、サタンとの大争闘における驚くべき功績とをお示しになると、贖われた者たちの心はいっそう熱烈な献身の念に燃え立ち、いよいよ喜びに満たされて黄金の立琴をかき鳴らし、万の幾万倍、千の幾千倍の声が一つになり、賛美の一大コーラスとなって盛りあがる。

「また、わたしは、天と地、地の下と海の中にあるすべての造られたもの、そして、それらの中にあるすべてのものの言う声を聞いた、『御座にいますかたと小羊とに、さんびと、ほまれと、栄光と、権力とが、世々限りなくあるように』」(黙示録 5:13)。

大争闘は終わった。もはや罪はなく罪人もいない。全宇宙はきよくなった。調和と喜びのただ一つの脈拍が、広大な大宇宙に脈打つ。いっさいを創造されたおかたから、いのちと光と喜びとが、無限に広がっている空間に流れ出る。最も微細な原子から最大の世界に至るまで、万物は、生物も無生物も、かげりのない美しさと完全な喜びをもって、神は愛であると告げる。(各時代の大争闘下巻 466, 467)

研究 30

三重のメッセージ

もうひとりの御使のメッセージ Part 9

準備はできているか

「だから、あなたがたも用意をしていなさい。思いがけない時に人の子が来るからである。」(マタイ 24:44)

「もしあなたが今日神と正しければ、キリストが今日来られたとしてもあなたは準備ができている」(主は来られる 98)

「今日、キリストが天の雲に乗っておいでになると考えてみなさい。だれが……このお方にお会いする準備ができているであろうか。わたしたちが今のありのままの状態で天の王国に移されると考えてみなさい。わたしたちは神の聖徒たちに一致し、王家すなわち天の王の子らと調和して暮らす準備ができているであろうか。あなたはさばきのためにどのような準備をしただろうか。あなたは神と和らぎをなしているであろうか。あなたは神と共に働いているであろうか。あなたは周りの人々、すなわち神の戒めを守っていないあなたの家庭にいる人々、近隣の人々、自分たちと接触する人々を助けようとしているであろうか。『主の戒めは完全であって、魂を改心させる』。そうであれば、わたしたちはそれを自分たちの魂に受け入れ、それに心からの服従をお捧げしよう。神の戒めの規則に従うことによって、それに誉れを帰そう。しかし、日常生活において実行されないならば、告白には何の価値もないことを覚えていよう。神はわたしたちが真理において、わたしたちがご自分の律法を守っているかどうかをご存知である。このお方はまさにわたしたちが何をしているか、まさにわたしたちが何を考え、何を語っているかをご存知である。わたしたちは王にお会いする準備をしているであろうか。

このお方が天の雲に乗って、力と大いなる栄光をもって来られるとき、あなたは「見よ、これはわれわれの神である。わたしたちは彼を待ち望んだ。彼はわたしたちを救われる。』と言うことができるであろうか。こう言うことができる人々に、キリストは次のように仰せになる。『もっと上にあがってきなさい。この地上であなたがたはわたしを愛した。あなたがたはわが意志を行うことを愛した。あなたは今や聖なる都に入り、永遠の命の冠を受けることができる』。

もし天国にわたしたちが今の状態のまま入ることを許されるとしたら、わたしたちのうち何人が神を仰ぎ見ることができるであろうか。わたしたちのうち何人が礼服を着ているであろうか。わたしたちのうち何人がしみもしわもそのたぐいのものがないであろうか。わたしたちのうち何人が命の冠を受けるにふさわしいであろうか。

あなたが家庭の中でのあるがままの姿が、あなたが教会の中にいるときの姿であることを覚えていなさい。あなたが自分の子供たちを扱うとおりに、あなたはキリストを扱うようになるのである。もしあなたがキリストに似ていない精神をいだくなら、あなたは神を辱めているのであり、あなたの地位がどんなに高かろうと、牧師や会長であろうと関係ない。地位が人物を作るのではない。人を朽ちることのない命の冠を受ける価値のあるものとするのは、内に形作られたキリストである。

あなたがいらだった言葉を語りたくなる誘惑にあうとき、誘惑に抵抗するための恵みを求めて祈りなさい。あなたの子供たちは、あなたの語るのを自分たちが聞いたとおりに語るようになることを覚えていなさい。自分の模範によって、あなたは彼らを教育しているのである。もしあなたが同胞の教会員にいらだった言葉を語るとすれば、あなたは天に入ることを許されれば、そこでも同じような言葉を語るようになることを覚えていなさい。しかし、あなたが変らないかぎり、あなたがそこにいることは決してないのである。」

今がその時である

今は、わたしたちの洗濯とアイロンがけの時―わたしたちが小羊の血によって品性の衣を清くするべき時―である。ヨハネは次のように言った、『見よ、世の罪を取り除く神の小羊』。わが天父よ、わたしはあなたに感謝いたします。わたしは、

わたしたちの罪を取り除くために、あなたがわたしたちにイエスを賜ったゆえに、あなたをほめ讃えます。わたしたちはこのお方に罪を取り除いていただかないのであろうか。わたしたちは自分たちの罪を去らせないのであろうか。

キリストは、ニコデモに仰せになったように、わたしたちに次のように仰せになる、『あなたがたは新しく生れなければならない』。新生が起こらなければならないのは、ここ、すなわちテストと試練のこの世なのであって、天国ではない。

兄弟姉妹の方々、わたしはあなたがたにお願いする。永遠の命の冠を得るために熱心に労しなさい。報いには、戦いや努力の価値がある。パウロはクリスチャンの戦いを戦っている人々を競走する競技者にたとえた。彼がたとえとして用いた競技の中では、ただ一人だけが賞を受けることができた。わたしたちが走っている行程では、すべての人が差し出されている報い―永遠の命の冠―を受けることができる。わたしはこの冠がほしい。わたしは神の助けによって本気でこれを手に入れるつもりである。わたしは王をその麗しさのうちに眺めることができるように、必ず真理を固くつかむのである。……

わたしたちは神と比べるとき、ほんの小さな子どもにすぎない。このお方からわたしたちは自分たちの教訓を学ばなければならない。このお方はわたしたちが服従と悔悟のうちにご自分の前に心をへりくだらせることを望んでおられる。このお方はわたしたちが互いに親切で優しく同情深い言葉を語るようにと望んでおられる。そのような言葉を語るように、自らを教育しなさい。神に対して、また互いに礼儀正しくありなさい。このお方は、あなたがたが世の前でご自分に栄光を帰すことができるように、あなたに最上の方法を身につけてほしいと望んでおられることを覚えていなさい。このお方はあなたが互いに一致し、愛し合って生活するよう願っておられる。もしあなたがこの地上で互いに愛するならば、あなたは尽きることのない永遠にわたって贖われた者たちと生きるようになることを覚えていなさい。ああ、これらのことを考えなさい！神があなたがたの心を今日、かつてなかったほどにかきたててくださるように。このお方があなた方を導いて、『よくよくあなたに言っておく。だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない』との言葉に注意を払わせてくださるように。……

わたしたちは自分自身の魂が、主が次の言葉に述べておられる精錬を受けていることを確認しよう。わたしは『金を精錬するように、これを精錬する』。『わたしは人を精金よりも、オフルのこがねよりも尊くする』。神はわたしたちをこのよう

に精錬してくださるのであるから、わたしたちはこのお方のみ手のうちに自らの身をおこう。わたしたちがこのお方のために働いている場所に立ち、何ものにもそれを妨げさせないようにしよう。そのとき、このお方はわたしたちに力と恵みと能力を与えてくださり、わたしたちは神の救いをみるようになる。このお方の恵みがわたしたちに与えられ、そして神はわたしたちが周囲の人々に心地よい言葉や親切な行いのうちにそれを与えるのを助けてくださるのである。

両親の義務

ご両親がた、教会のために家庭で働きなさい。そこであなたの子供たちの教育が始まるのだということを覚えていなさい。父親は家庭の祭司となり、母親は教師となるべきである。彼女は自分の子供たちを訓練し、教育しなければならない。そして彼らが神の王国への入国許可を得ることができるような品性を築く手助けをしなければならない。ご両親がた、自分の子供たちをよく観察し、彼らの様々な特質を理解できるようにしなさい。もしあなたが彼らに荒々しく無慈悲に話すならば、あなたは彼らのうちに荒々しく無慈悲な精神を発達させることになる。あなたが自分の子供たちを扱うときに、キリストの小さな者たちというかたちで、あなたはキリストを扱っているのだということを覚えていなさい。

家族のあと、次に教会にくるのである。家族の感化力は、教会において助けや祝福になるものとならなければならない。決して文句やあら捜しの言葉を語ってはならない。中傷の精神が入り込むことを許したために、霊性がほとんど壊滅している教会がある。なぜわたしたちは非難やとがめの言葉を語るのであろうか。沈黙することは、あなたに対して荒々しく無礼な言葉を語っている人に対して、あなたが与え得る最も強い譴責である。完全な沈黙を守りなさい。しばしば沈黙は雄弁である。わが兄弟よ、あなたは中傷の精神をもって天国に入ることは決してできないのである。……

『忍耐についてのわたしの言葉をあなたが守ったから、わたしも、地上に住む者たちをためすために、全世界に臨もうとしている試錬の時に、あなたを防ぎ守ろう』。神はわたしたちに臨もうとしている試練について、わたしたちにお教えになった。そしてこのお方はわたしたちに、ご自分のみ力によってわたしたちを守ると仰せになったのである。わたしたちはこのお方の約束を受け入れないのであろう

か。

『わたしは、すぐに来る。あなたの冠がだれにも奪われないように、自分の持っているものを堅く守っていなさい。勝利を得る者を、わたしの神の聖所における柱にしよう。彼は決して二度と外へ出ることはない。そして彼の上に、わたしの神の御名と、わたしの神の都、すなわち、天とわたしの神のみもとから下ってくる新しいエルサレムの名と、わたしの新しい名とを、書きつけよう』。

あなたが批判したり、難癖をつけたりする誘惑にあうとき、あなたの思いをこの聖句にとどめなさい。神の溶かす恵みがあなたの心に入り、あなたは神の小さな子供たちのためにいかに働くべきかを知るようになる。あなたが自分の周りにいる者たちのために働き、彼らに義の模範を残すとき、あなたは主人のお褒めの言葉をいただくようになるのである。」(世界総会冊子 1903 年 4 月 6 日)

わたしたちは神の備えの日にいる

「わたしは、あなたがたがみな主を見出すことができるうちにこの上なく熱心にこのお方を求めるようにというわが魂の激しい願いを言い尽くせない。わたしたちは神の備えの日にいる。何一つとして、大いなる裁きの日のために準備をする働きからあなたの思いを引き離すだけの価値があるかのようにみなしてはならない。準備しなさい。冷たい不信があなたがたの魂を神から引き離すようなことがあってはならない。かえって、このお方の愛があなたがたの心の祭壇の上に燃えるようにしなさい。」(教会への証 5 巻 590)

「わたしは、残りの民が、この地上に起ころうとしていることのために、準備をしていないのを見た。最後の使命を持っているという信仰を公言する人々の大部分は、昏睡状態のような無感覚に陥っている。わたしと一緒にいた天使は、非常な厳粛さをもって叫んだ。『準備せよ、準備せよ、準備せよ。神の恐ろしい怒りが間もなく臨もうとしている。神の怒りは、あわれみを混じえないで、注がれようとしている。それなのに、あなたがたは準備ができていない。衣を裂かないで、心を裂きなさい。残りの民のために、大いなる働きがなされなければならない。彼らの多くは、小さい試練に心を奪われている』。天使は、また言った。『悪天使の軍勢が、あなたがたの回りにいて、あなたがたをわなにかけて捕えるため、その恐ろしい暗黒を忍びこませようとしている。あなたがたは、準備の働き

と、この最後の時代のために何よりも重要な真理から簡単に心をそらせてしまう……』。」（初代文集 222, 223）

すべての人が聖書研究生となるべきである

「イエスに従う人々は、もし神のみ言葉に対して無知のままでいながら満足しているならば、神に思いとみ旨にかなっていないのである。すべての人が聖書研究生となるべきである。キリストはご自分に従う人々に次のようにお命じになった、『聖書を調べなさい。なぜなら、あなたがたは聖書の中に永遠の命があると思って調べているが、この聖書は、わたしについてあかしをするものである』。ペテロはわたしたちに次のように訓告している、『ただ、心の中でキリストを主とあがめなさい。また、あなたがたのうちにある望みについて説明を求める人には、いつでも弁明のできる用意をしていなさい』。」（教会への証 2 巻 633, 634）

「真に改心している者は、自分たちの聖書の理解においてますます知的なものとならなければならない。それは彼らが光と救いの言葉を、闇のうちにおり自分たちの罪のうちに滅びつつある人々に語ることができるようになるためである。」（教会への証 9 巻 121）

「わたしたちは人々に神の最後の警告を伝えなければならない。そして聖書を研究するわたしたちの真剣さと光を広めるわたしたちの熱意はどれほどのものであるべきであろう！神の啓発を受けてきた魂一人ひとりは、それを与えようと求むべきである。働き人たちは戸別にまわり、人々に聖書を開き、出版物を行きめぐらせ、他の人々に自分自身の魂を祝福した光を伝えよう。」（福音宣伝者 353）

「よく均整の取れた働きは、働き人たちのための訓練学校が進展しているときに、もっともよく実施される。この訓練学校や都会の伝道に関連して伝道講演会が開催されるとき、より深い霊的な理解力をもった経験のある働き人たちが、全般的な公の伝道努力がなされるときに心を尽くして一つになれる人たちを、毎日指導すべきである。」（教会への証 9 巻 111）

キリストの恵みの油の十分な満たし

「自分の主がいつ来られるかその日時がわからないからと言って、その警戒を

緩める者、不注意になり、自分の器に油（キリストの恵み）を満たすことを怠る者は、準備ができていないことが明らかになり、婚宴に入ることはない。わたしたちの主が見張るようにとしばしばくり返された警告は、どれほど厳粛なことであろう！このお方は『あなたがたも用意していなさい。思いがけない時に人の子が来るからである』と仰せになる。もし大いに愛せられる友人が数時間で息を引き取ろうとしているときに、わたしたちに勧告や警告や教えを与えるとすれば、わたしたちはその人の言葉をどれほど注意深く心に蓄え、どれほど忠実に彼の教えに従い、彼の警告に注意を払うことであろう。キリストは、わたしたちの最高の友である。なぜなら、わたしたちを無限の値をもって買われ、わたしたちをご自分のむすこ娘としてくださったのだから。そして魂をかきたてるこれらの言葉は、わたしたちの益のためにこのお方によって語られてきたのである。わたしたちはこのお方の権利がわたしたちに及んでいることを認めて、このお方にわたしたちの奉仕と共感とをお捧げしないのであろうか。もしこうするならば、わたしたちはこのお方の警告をなおざりにするようなことはない。『だから、目をさましていなさい。いつ、家の主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、にわとりの鳴くころか、明け方か、わからないからである。あるいは急に帰ってきて、あなたがたの眠っているところを見つけるかも知れない。目をさましていなさい。わたしがあなたがた〔弟子たち〕に言うこの言葉は、すべての人々に言うのである』。『腰に帯をしめ、あかりをともしていなさい。主人が婚宴から帰ってきて戸をたたくとき、すぐあけてあげようと待っている人のようにしていなさい』。

今はわたしたちがキリストの恵みの油の豊かな満たしを我が物としているか否かを調べるときである。賢いおとめたちの知恵とは、自分たちの運命を思慮の浅いおとめたちの運命とは異なるものとした油を、自分自身に満たしたことにあった。思慮の浅いおとめたちは、自分たちのともし火の器に油を切らさないようにすることを怠ったのであった。聖書では、油は聖霊の象徴として用いられている。賢いおとめたちは信仰と愛と忍耐をもった者たちであり、その経験が日ごとに聖霊に養われる者たちであった。彼らは不注意な軽視によって世に迎合（げいごう）することがなかった。彼らは日ごとの準備を後に延ばすことなく、イエスが導かれるところへはどこへでも従ったのである。神はゆらめく信仰をお喜びにならない。それは消えてしまうともし火にたとえられている。このお方はその経験があかあかと燃えるともし火のような者たちをお喜びになる。このお方に従う人々は、世にお

いて光として輝くべきである。キリストの僕たちは自分たちのともし火の芯を切りそろえて、燃やしているべきである。それは彼らが自分たちの光を、キリストに従っているほかの人々の光に加えることができるためである。神の事柄に関して毎日生きた経験を得ようと日々願ってはいない人々は、このお方の是認を受けることなく、消えてしまうともし火を持った人々と共にいることが見つけられ、小羊の婚宴に入る準備ができないのである。わたしたちは、『さあ、花婿だ』との叫びが聞かれる最後の数分前に起きて、油が燃え尽きてしまった自分たちのともし火をかきあつめ、そのときにそれを満たそうと思っても、小羊にお会いする準備はできない。わたしたちの唯一の希望は日ごとに神を愛し、真理を愛し、しかもその明快な議論のゆえではなく、ただ真理であるがゆえに愛することである。わたしたちは真理をわたしたちの心と思いに入れ、毎日生きた輝く光となり、日ごとにますますイエスを学ばなければならない。わたしたちの会話は、主イエス・キリストが来られることを待ち望んでいる天についてでなければならない。わたしたちはこのお方の来臨について多く語るべきである。そのときわたしたちは絶えず、上より、すなわちあらゆる霊的な力の源であるお方よりもたらされる恵みを受けるようになる。

すでにずいぶん時はたった。今は無関心で不注意な眠りをむさぼっている場合ではない。今や花婿の声を聞いて大いに喜ぶべき時である。小羊の婚宴を讃美する時なのである。わたしたちにとってはっきりさせるべき問いは、わたしたちは賢い者たちと思慮の浅い者たちのどちらの部類の中にいるであろうか、ということである。神はわたしたちが賢い者たちの中にいるように助けてくださる。『小羊の婚宴に招かれた者は幸いだ』。」（ｻｲﾝｽﾞ・ｵﾌﾞ・ﾀｲﾑｽﾞ 1894 年 8 月 6 日）

「それはちょうど、旅に立つ人が家を出るに当り、その僕たちに、それぞれ仕事を割り当てて責任をもたせ、門番には目をさましておれと、命じるようなものである。だから、目をさましていなさい。いつ、家の主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、にわとりの鳴くころか、明け方か、わからないからである。あるいは急に帰ってきて、あなたがたの眠っているところを見つけるかも知れない。目をさましていなさい。わたしがあなたがたに言うこの言葉は、すべての人々に言うのである。」（マルコ 13:34 ～ 37）

「主人が婚宴から帰ってきて戸をたたくとき、すぐあけてあげようと待っている人のようにしていなさい。」（ルカ 12:36）

（52 ページの続き）
から神さまのことを聞いて、いつも神さまが言われることを守ってきました。ユダ王国の人々が神様のいうことを聞かなくなったときにも、彼らは変わることなくいつも神さまの言われたことを守ってきたのです。

ああ、しかし、そのダニエルと三人のお友だちも、長いながい道のりをバビロンまでつれていかれました。・・・

さて、バビロンに着くと、バビロンの王さまが言いました。「連れてきた人々の中から、王族もしくは貴族の血統で、身に傷がなく、きれいで、かしこい青年たちを連れてきなさい。彼らにバビロンの学問を教え、将来はこの国の大臣にしよう」。

こうしてつれてこられた青年の中にダニエルたちがいました。

彼らは 3 年の間、王さまの食事と王さまの飲み物があたえられ、バビロンの学問を学ぶのでした。ああ、しかし、その食事と言ったら…、それに王さまの飲み物はお酒です。神さまが「だめ」とおっしゃったものばかりなのです…

ダニエルは友だちと相談して言いました。「ぼくたちは神様にお祈りしよう。・・・王さまには従うべきだけど、神様に従う方がもっと大切だよ。この食べ物は食べられませんと言ったら、場合によっては命をうしなうことになるかもしれないけれど、ぼくは王さまの食べ物や飲み物で、自分をけがすことはしたくない」と言いました。「どうだろう、長官に頼んでみよう」。三人の友だちも言いました。「そうしよう」。

しかし、長官にそのことをはなしたら、心配して言いました。「王さまが、あなたがたの食べ物と、飲み物とを定められたので、わたしはあなたがたの健康の状態が、他の若者たちよりも悪いと、王が見られることを恐れるのです。そうすればあなたがたのために、わたしの命が、あやうくなるでしょう」。

そこで、ダニエルは自分たちの世話役である家令に「どうぞ、しもべらを十日の間ためしてください。わたしたちにただ野菜食を与えて食べさせ、水を飲ませ、そしてわたしたちの顔色と、王さまの食物を食べる若者の顔

色とをくらべて見て、あなたの見るところにしたがって、しもべらをあつかってください」。そうしたら、家令はこれを聞きいれてくれました！

この瞬間、ダニエルは思いました、「勝利した！」。

十日の終りになってみると、彼らの顔色は王の食物を食べたすべての若者よりも美しく、また健康的な体でした。

そのため、これから三年の間、野菜食と水をいただくことができるようになったのです！

さて、学問の方はどうなったと思いますか？

神さまは、ご自分の言われたことを守るダニエルと三人の友だちを、おしみなく祝福することがおできになりました。そこで彼らに知識を与え、すべての文学と知恵にさとい者とされました。

さて、3 年の教育期間が終わり、長官は、青年たちを王さまのところへ連れて行きました。

さあ、試験です。王さまはいろいろな質問をしました。

すると、ダニエル、ハナニヤ、ミシャエル、アザリヤにならぶ者はいませんでした。なんと全国からとても優秀な博士たちがあつまっていたのに、ダニエルと三人の友だちのほうが、知恵と理解において十倍もまさっていたのです。こうして、彼らは王さまのすぐそばで仕えることになりました。

ダニエルと三人の友だちの経験は、頭も体も心も健康であるための秘訣を教えてくれます。それは―神さまの言うことをいつも聞いていること―です。

もしかしたら、わたしたちも人から何かを言われて「これでだいじょうぶかな？」と考えることがあるかもしれません。でも、そのとき、ダニエルたちのように「神様さまの言われた」通りにするなら、間違いがありません。人は間違えますが、神さまは決して間違えませんし、それだけでなく、言われたとおりにする勇気と平安もくださいます。

『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである』。（マタイ４：4）

かぼちゃのカレーコロッケ

■材料　12 個分

かぼちゃ	半分
たまねぎ	2 個
炊いた玄米	半カップ
砕いたくるみ	半カップ　※ほか、お好みでコーンなど
カレー粉	小さじ 1/2
コリアンダー	適量
クミン	適量
ガーリックソルト	適量
塩	小さじ 1
昆布粉末だし	2 グラム
〔衣〕	
小麦粉、水	溶いてとろりとするくらい
パン粉	

■作り方

1. かぼちゃをよく洗い、ふかします。
2. 玉ねぎをみじん切りにして、オリーブ油と塩をひとふりして（分量外）で炒めます。
3. かぼちゃがやわらかくなったら、熱いうちにつぶし、たまねぎとその他の材料を全部入れて混ぜます。味はお好みで辛くしたくない時は、カレー粉をおさえて、コリアンダーとクミンを増やします。
4. 材料を 12 等分して、まるめます。
5. 衣のために小麦粉と水をまぜます。
6. コロッケをまるめて、全体に衣をつけたあと、パン粉をまぶします。
7. オリーブ油をフライパンに入れて火にかけ、パン粉を落としてみて揚がるくらいの温度になったら、コロッケを入れます。
8. きつね色になったら、キッチンペーパーなどに引き上げて油を切ります。
9. 油が切れたら、お皿に盛ってできあがりです。

教会プログラム (毎週土曜日)

安息日学校：9:30-10:45 (公開放送)

礼拝説教：11:00-12:00 (公開放送)

午後の聖書研究：14:00-15:00

【公開放送】http://www.4angels.jp

聖書通信講座

※無料聖書通信講座を用意しております。

□聖所真理

お申込先：〒 350-1391　埼玉県狭山郵便局私書箱 13 号「福音の宝」係

是非お申し込み下さい。

書籍

【永遠の真理】聖書と証の書のみに基づいた毎朝のよみもの。

【安息日聖書教科】は、他のコメントを一切加えず、完全に聖書と証の書のみに基づいた毎日の研究プログラムです。

神さまの食事を選んだダニエル

むかしむかし、そう、イエスさまがお生まれになる 600 年以上もむかしのこと、ユダの国という国がありました。ユダ王国ができたころ、王様をはじめ、みんな神さまが教えてくださることをよく聞きました。ですから、みんな幸せで、とっても強く、まわりの国々の人たちにも「あれが神さまの国だよ！」と、とても有名でした。

ところが、悪い王さまに代わると、神様の言われたことを守らなくなり、ユダ王国全体が神さまの言うことを聞かない国になってしまいました。そのため、それまでと違って弱い国になってしまいました。神さまはそれをごらんになって悲しまれ、なんども「これが正しい道である。これに従いなさい」と声をかけられましたが、あまりにも言うことを聞かないのですっかり弱くなり、ついにあるとき、バビロンという国がせめてきました。

馬の音、叫び声が近づいてきました！ドドドドドっ！

城壁の上で見張りをしていた兵隊さんたちは、大きな音でラッパを鳴らし、いそいで門が閉められました。

しかし、外からきた軍勢は、ドーン！ドーン！と大きな音を立てて、壁を大きな石で打ちつけました。……ああ、そしてついに！壁の一部がくずれおちてしまいました。

どーっと入ってきたバビロン軍は、ユダ王国の人々をつかまえて、長い砂漠の道をバビロンへひいていきました・・・・

このようにつかまえられた人々の中に、ダニエルという青年がいました。彼とその三人の友だちハナニヤ、ミシャエル、アザリヤは、小さい時からお父さんやお母さん

（48 ページに続く）